

第3章 出土遺物

1 概要

古天神古墳からは、1915（大正4）年の発見時におもに石室から遺物が出土し、それらは東京国立博物館に所蔵されている。また、ほかに鳥根大学所蔵品や地元の研究者による採集品があることはすでにふれたとおりである。鳥根大学所蔵品については、これまで一括して同じ標本箱中に遺物ラベルとともに保管されており（第12図）、出土地情報としては古天神古墳であろうとの推定にとどまっていた。今回、東京国立博物館所蔵資料との接合関係を確認したことにより、ようやく出土古墳を確定するに至ったという経緯をもつ。

本章では、古天神古墳出土と確実に視される遺物を悉皆的に調査し、二次資料化を実施した成果を報告する（図版5）。まずは個別品目の報告に先立って、現存する資料の全体像を一覧表として提示する（第1表）。表には古天神古墳から出土した遺物の員数を記載している記録として、1915（大



第12図 鳥根大学所蔵資料の収蔵状況

正4）年8月22日付『山陰新聞』、東京国立博物館の台帳〔本村1981：110-111〕、高橋健自による出土遺物報告〔高橋1919〕との対応関係を示すとともに、現段階で確認できる品目と員数を記載した。

第1表 古天神古墳出土遺物一覧

『山陰新聞』	員数	東京国立博物館台帳	員数	高橋健自遺物報告	員数	本 書	員数
鏡	1	五獣鏡	1	五獣鏡	1	旋回式獣像鏡系倭鏡	1
金属製環	6	金環	3	金環	2	金環	3
		銀環	3	銀環	3	銀環	3
刀身	2	円頭大刀	1	円頭大刀	1	銀装円頭大刀	1
刀類の破片	—	鉄刀片	1	刀身	数口	金銅装大刀	1以上
						大刀〔銀象嵌装大刀〕	7以上〔1〕〔6片〕
						劔	1
—	—	鉄器片	一括	刀子片	数口	短刀	10以上
						刀子	8以上〔3〕
						砥石	1
鈴様の破片	—	雲珠片	一括	轡残片	一括	鉄鎌	26以上〔7〕
						轡	2〔2片〕
						雲珠	1〔1片〕
土器	16	蓋坏 高坏 甗 — 蓋及脚付埴 提瓶 埴輪・須惠器片	5 1 1 — 1 2 一括	蓋坏 高坏 甗 — 蓋及脚付埴 提瓶 埴輪・須惠器片	5 1 1 — 1 2 数個	辻金具	3
						須惠器蓋坏	5
						須惠器高坏	4〔3〕
						須惠器甗	1
						須惠器直口壺	1〔1〕
						須惠器蓋及脚付埴	1
						須惠器提瓶	2
須惠器破片	5〔1〕〔1〕						
軟質土器	2						
埴輪片	19〔13〕〔4〕						

〔凡例〕員数は可能な限り個体数を記すこととし、破片数の場合は○片と記載する。〔 〕内は鳥根大学所蔵資料、()内は恩田清氏採集資料〔伊藤ほか2008〕の数を表す。

2 銅 鏡

回転式獣像鏡系倭鏡（第13図、図版6・7）

神獣鏡を原型として日本列島において製作された倭鏡の一系に属する鏡である。その名称は内区主像の文様構成にしたがって「一神四獣鏡」や「神獣鏡」ともしうるが、同一方向に回転するように獣像をめぐる特徴をもつ関連性の高い一群に対して設定した「回転式獣像鏡系」〔森下1991〕という系列名を使用する。

現 状 欠損のない完形品であり、東京国立博物館が所蔵する。保存処理はなされておらず、全体が薄い錆に覆われており、緑色を呈する。わずかににぶい光沢をもった地金の部分がみられる。鏡背面の外区を中心とした範囲、鏡面の広範囲に目の粗い布が付着する。また、鏡背面の文様凹部には赤色顔料が部分的にみとめられる。

法 量 直径は約13.6cmである。厚さは内区が1.5mm程度、縁部の薄い部分で1.6mm程度、縁端部ではおよそ4mmとなる。現状での鏡面の反りは、平均的な部分で2.5mm程度と直径の割に弱いものである。重量は190.6gである。

文様・形態 中心に鈕があり、外側へと内区主文部、界圏を介して外区、さらに外側が縁部となる。界圏をもつものの、内外区の施文基盤面に段差のない扁平な鏡体である。

鈕は直径が約1.9cm、鏡背面からの高さ約1.0cmと整った半球形を呈する。面径に比して小さめの鈕である。鈕孔は幅約6mm、高さ約3mmの長方形を呈する（図版7-1）。ただし、一方は隅部に丸みを帯びた台形に近い形状となっている（図版7-2）。鈕孔の形状にみる歪さは鑄張りの発生に起因する変形と考えられる。鈕孔の下辺は鏡背面の高さと一致する。鈕の外周には1条の円圏をめぐるして鈕座とするが、鈕孔付近はこの円圏座が鑄出されていない。鈕孔に相当する部分の中子が鑄型に設置される際に、鈕座部分にまでおよんだ可能性を考える。

内区主文部は、神像1体と獣像4体の合計5像からなる。乳による区画はみとめられない。

神像は坐像の正面観を表現したものとみられ、肩に相当する胴部上半の両脇に縦方向の平行線を入れたやや低い円形の隆起を配し、袂にあたる胴部下半の両脇に縦方向の平行線をほどこす。頭部の表現ははっきりしない。神像の両脇には半円形の図文がともなう。

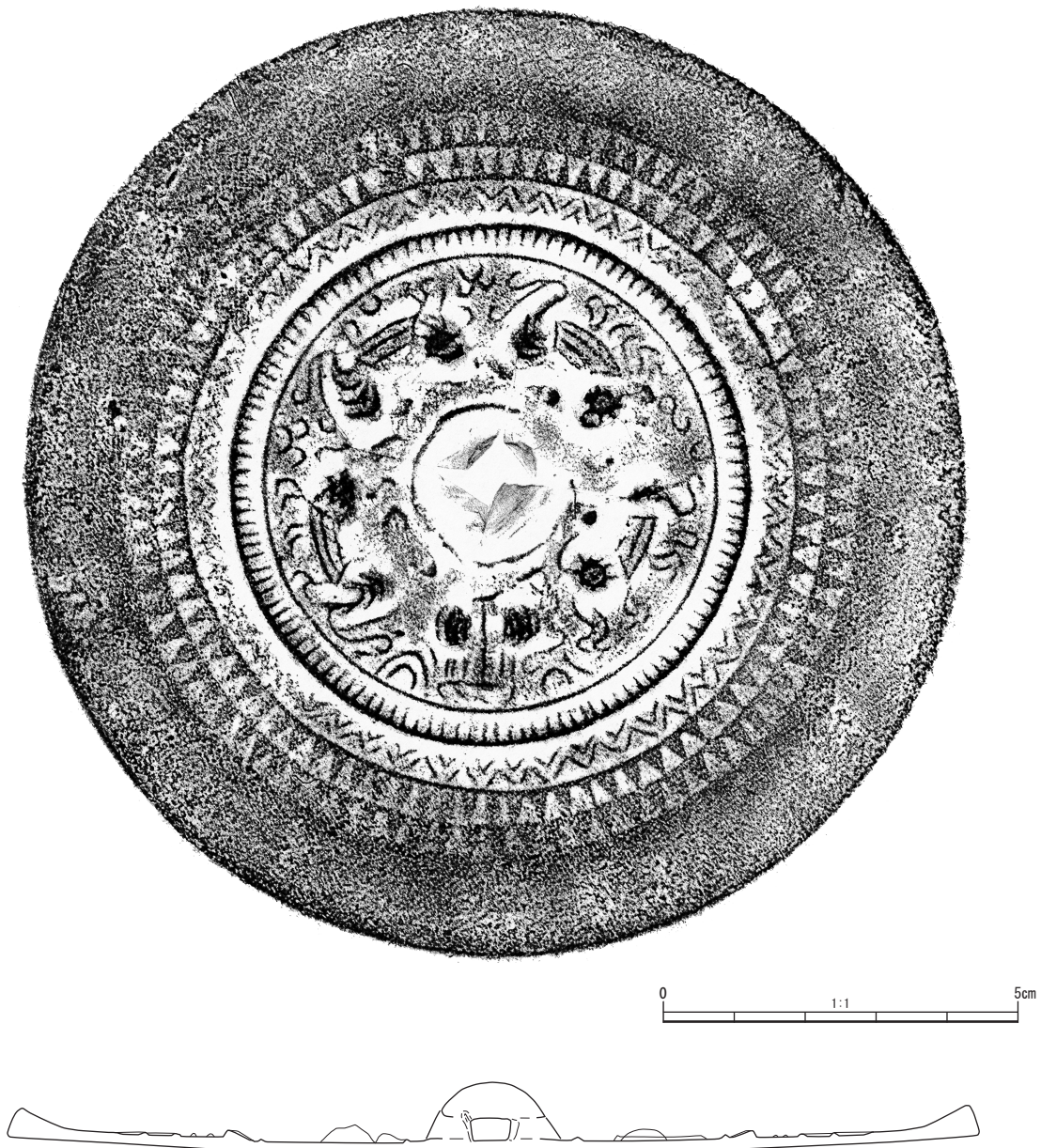
獣像は側面観の4体が時計回りに同一方向へとめぐる。胴部はほぼ同じ表現を繰り返すのみであるが、頭部の表現には違いがみられる。獣像の肩にあたる部分と腰にあたる部分とをそれぞれ膨らみによってあらし、二つの膨らみをさらに低い隆起の腹部により接続することで胴部とする。肩にあたる部分の頂部に円形文を細線で表現し、円形文から放射状に直線を配することで獣毛をあらわす。腹部と腰部は平行線を充填する。肩部と腹部、腰部の境界には獣毛表現と直交する区画線を1条入れる。2本1組の脚部は細線によって表現され、肩部と腹部の境界や腹部に、2ないし3組配される。後脚は腰部の先端から2本1組の細線であらわすことを基本とする。脚部はくの字状の硬直化した表現であり、形骸化がみとめられる。明瞭な頭部をもつ獣像は2体のみであり、乳状の突起に細線を付加して鳥頭風とし、やや短いが弧状を呈する細線表現の頸部によって肩部と連結するものもみられる（図版7-3）。

内区と外区の境界は断面三角形の界圏によって画される。界圏には櫛歯文帯を入れる。外区は3条の文様帯からなる。内側から2条構成の複線波文帯、鋸歯文帯、鋸歯文帯である。複線波文帯はほかの2条より幅広であり、波文の屈曲部に途切れる部分がみられる。縁部は外区とごく小さな段差をな

す。内側が水平に近く、中ほどで屈曲しつつ厚みを増して縁端に至る。

鑄造・研磨 図で右上にあたる鈕孔は比較的先鋭に鑄出されるが、左下の鈕孔はやや丸みを帯びる。ただし、左下の鈕孔の丸みは湯周り不良ではなく、鑄張りに起因する変形である可能性が高い。湯口に関連する鑄造欠陥としては、むしろ図で右上の鈕孔の延長上にある獣像の肩部にみられる大きめの湯周り不良が注目され（図版7-4）、これを含めて鈕孔の開口方向の内区から外区にかけて文様が不鮮明となっている。したがって、表面観察から湯口の位置を推定するならば、鑄造欠陥が集中する図の右上の縁部にあった可能性を指摘できる。

仕上げの研磨は、鈕と縁部上面、縁端面、鏡面にほどこされる。その程度は表面を薄い錆が覆っているため不明なところもあるが、表面状態からはさほど強い研磨ではなかったと想定される。縁頂部に若干の丸みはあるが、鑄上がりも考慮するならば、摩滅の程度はごく小さいと判断される。



第13図 銅鏡

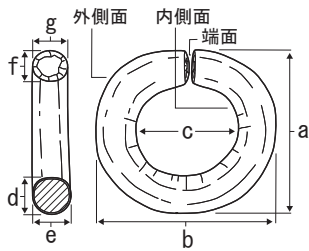
3 装身具

耳環6点を確認しており、すべて完形品である（第15図、図版7-5）。金環3点と、銀環3点からなり、いずれも東京国立博物館の所蔵である。細部の計測値は、第2表に示した（第14図）。

1～3の金環は金装の剥落部に緑青がみられ、重さもあることから、中実の銅芯であろう。内側面には環状とする際に生じた皺状の筋と、3の端面に金薄板を折り込んだ痕跡と皺があり、銅芯金薄板張りと考え。1・2は、製作技術や形態、法量、色調が類似しており、2点1組になるとみられる。

4～5の銀環は銀装が残存する部分が黒色の銹に覆われる。銀装の剥落部には緑青がみられ、重さもあることから、中実の銅芯であろう。6の内側面には環状とする際に生じた皺状の筋と、端面に銀板を折り込んだ痕跡と皺があり、銀薄板張りと考え。4と5は銹により端面の観察が不可能だが、銀装の残存範囲が広く、銀装に厚みがあるので銀薄板張りともみられる。3点とも銅芯銀薄板張りとなる。4・5は、製作技術や形態、法量が類似するため2点1組になる可能性が高い。

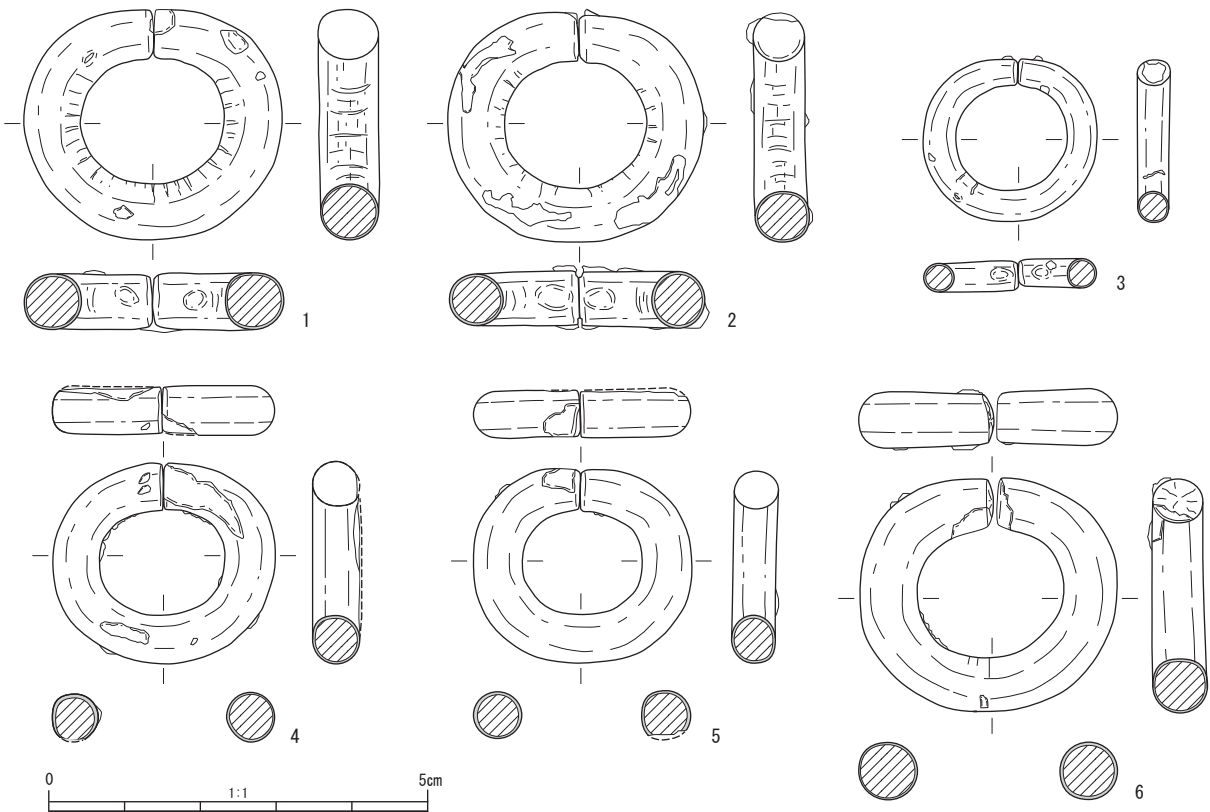
なお、6点とも断面は整った円形だが、端面付近のみ楕円形を呈し、1・2の端面付近の内側面にはへこみがある。環状に折り曲げる際に端面付近を工具で強く挟んだことがうかがわれる。



第14図 金環・銀環の計測位置

第2表 金環・銀環計測表

報告番号	計測位置 (mm)							重量 (g)
	a	b	c	d	e	f	g	
1	30.30	33.80	19.30	7.20	7.20	6.20	7.90	29.1
2	30.55	33.80	19.00	7.15	7.50	5.70	8.20	28.7
3	21.50	22.75	15.20	3.90	4.00	3.50	4.00	6.0
4	26.10	29.10	16.55	6.05	6.50	6.00	5.70	15.3
5	25.55	28.50	16.00	6.20	5.80	5.10	5.90	15.2
6	30.50	33.40	19.70	6.80	7.20	6.20	6.90	25.1



第15図 装身具〔金環・銀環〕

4 武器

(1) 銀装円頭大刀 (第16～24図、図版8～10)

銀装柄頭に金銅装の装具をもつ準素鞘の大刀である。高橋健自の1919年の報告〔高橋1919〕(以下、高橋報告)では柄頭から鞘尻金具までの状況が記載されているが、現存するのは、柄間の3分の1と鐔、鞘口から刀身切先までであり、柄頭と鞘尻金具は確認できない。現在は鞘口金具と鞘中金具の間の刀身は小片となり分離しているが、高橋報告では遺存していた。これを参考にすると、鞘と刀身の全長を復元することができる。鞘全長約76cm、刀身全長71.2cmである。柄頭からの復元全長は約96cmである。

柄頭は現在失われているが、高橋報告の実測図〔高橋1919〕で計測すると長さ約7.5cmで、次のように記載されている。「柄頭は銀金具で包み、同じく銀製六花形の座のある鷓目が表裏ともにあって、柄頭附属の縁は金銅で、鐔に接する縁と同式である。」これをうけて、町田章は「2枚合わせの円頭ならば、当然合わせ目の文様板(第63図の②文様帯にあたる)に言及するはずであるので、鑄造ないしは打出しでつくった袋状柄頭であったと思われる。」とする〔町田1987:94〕。また、銀製の柄頭の縁には後述する柄縁の責金具同様の金銅製責金具があったという点は注目される。

柄間は柄木に銀線を蛇腹巻にする。その形状は刃側が大きく削り込まれ柄間中央の幅が狭くなる。柄元幅3.6cmに対して、柄間中央幅3.0cmである。断面は刃側が尖る倒卵形である。銀線は幅1.6～1.7mm、厚さ0.6mm前後の断面かまぼこ形(やや三角形に近い)であり、タガネで刻みを入れる。そのピッチは5mmの間に4つの刻みを入れる。刻みは上からみると菱形に仕上がり、銀線の縁は垂直に切断されたような面をなす(図版9-8)。銀線の巻き方は、柄頭側からみて反時計回りに巻き、柄頭側から巻き始める。鐔側の終点の処理は、銀線を尖らせて、約5mm程度(X線画像での目測)柄木に垂直に差し込んでいることがX線画像からわかる。このために最後のひと巻きは、柄木に差し込む銀線端部がくる部分をあけるように、銀線をクランク状に曲げて巻く。その結果、先に巻いた銀線の一部が重なっており(第20図、図版9-7)、これにより銀線が柄頭側から巻かれたことがわかる。

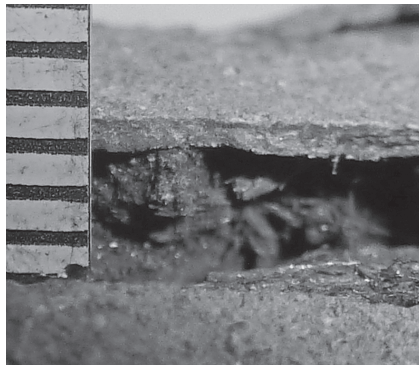
鐔と銀線の間柄縁には太さ2mmの金銅製の責金具がある。その断面形は柄頭側がかまぼこ形で鐔側を垂直に落とした形のものようである。断面は中実である。

鐔は金銅製の板状で、長径5.4cm、短径4.3cmで下端が尖り気味の倒卵形である(第16図)。柄縁からは7～8mm突出する。柄頭側には鑄状の面取りがあり、厚さは3.1～3.5mmである。鐔の端部(耳)は平坦で厚さ2.2～2.5cmである。

釧は金銅製である。鞘口金具の中に納まっており、破損した鞘口金具の隙間から部分的に観察することができる。これにX線画像の所見をあわせて以下に記す。釧は刀身の錆膨れにより割けて変形



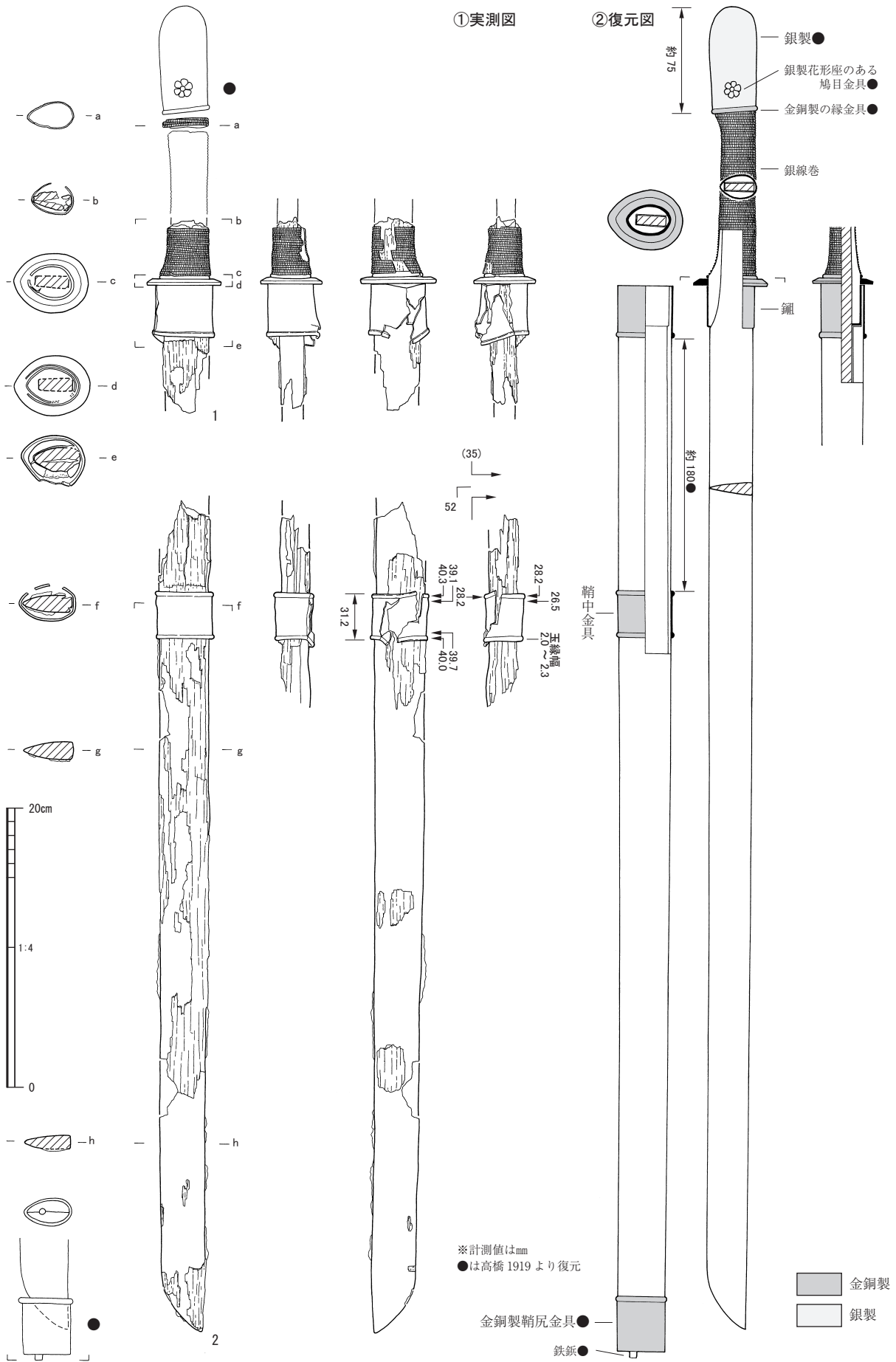
第16図 鐔の形状



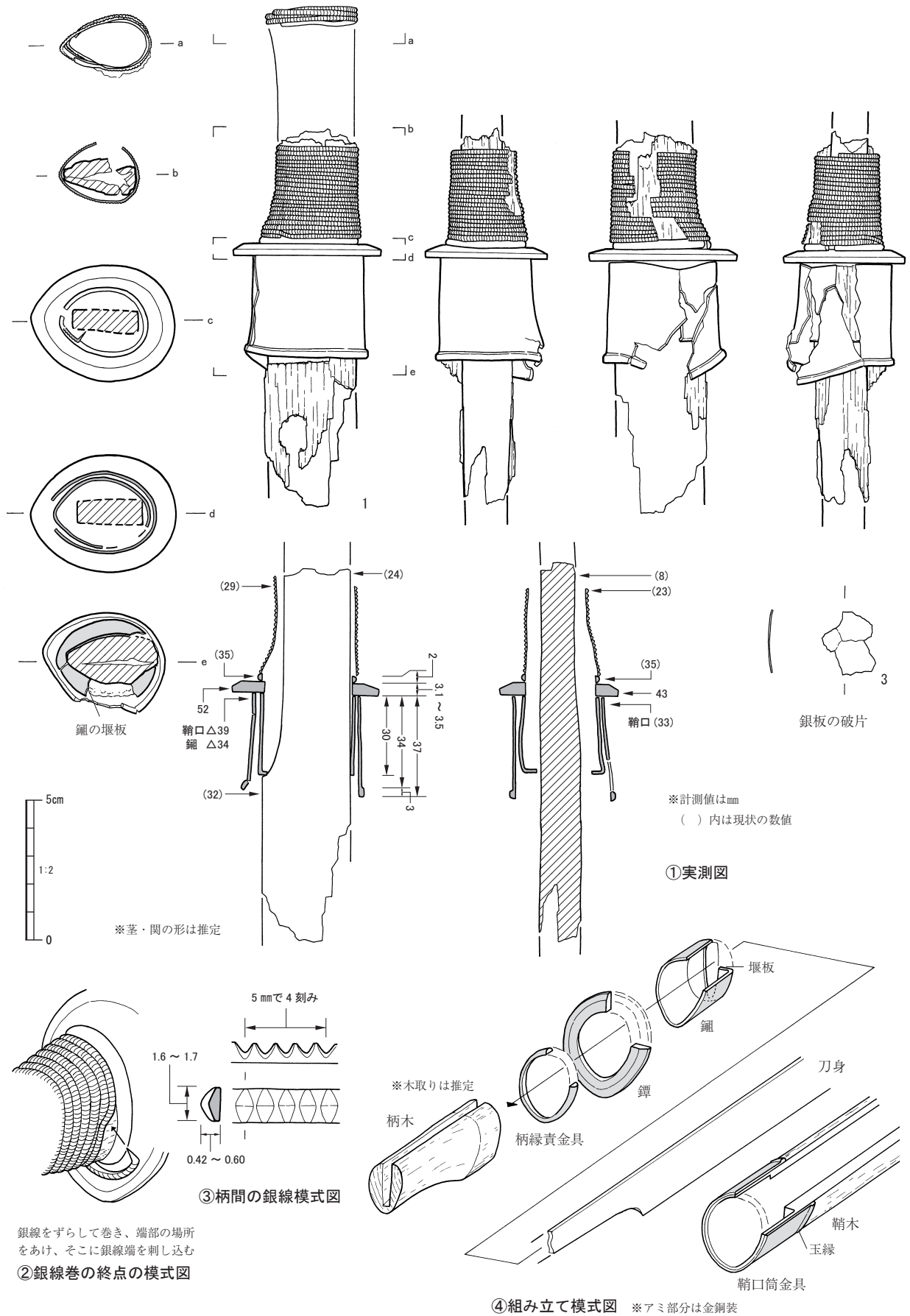
第17図 鞘口筒金具の厚さ(目盛1mm)



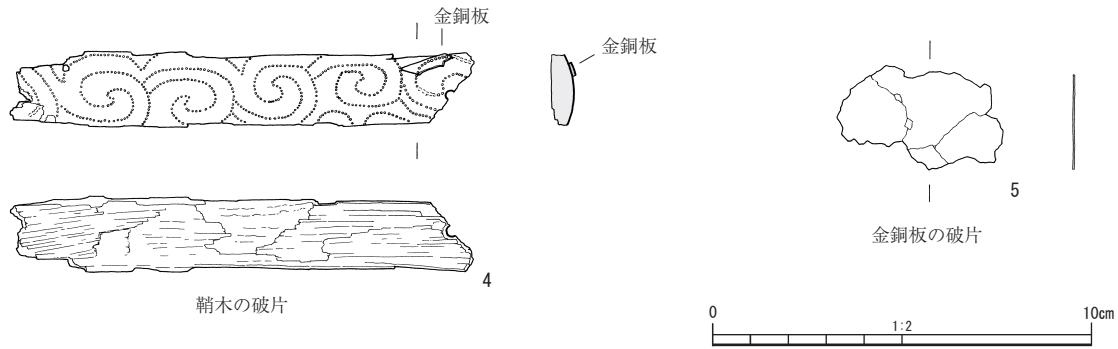
第18図 鞘口筒金具の玉縁断面



第 19 図 銀装円頭大刀 (1)



第20図 銀装円頭大刀(2)



第21図 金銅装大刀関連の破片

が著しい。鍔は断面倒卵形であり、刀身茎が通る窓を残して刃側の先端を折り返してふさぐ。この堰板が別材で蓋をしたものでないことは、鍔端部がわずかに丸みをもっていることから推測でき、X線画像でも確認できる。堰板の窓は刀身茎の断面形にあわせて台形であることがX線画像でわかる。

鞘口金具は金銅製、倒卵形の筒金具で、刃先側にのみ幅2.6mmの玉縁がつく。銅板を筒状に丸めて鑲付けしたものであろうが、鑲付け痕は確認できていない。玉縁の破断面をみると筒金具端部に玉縁部分がついている状況がみられる（第18図）。端部を折り返して玉縁を作ったか、または貴金具状の別材を筒金具にのせて鑲付けして玉縁を作ったと考えられる。他の例から考えて、前者の可能性が高い。玉縁の断面形は丸ではなく台形である。筒金具の銅板の厚さは約0.8mmである（第17図）。

高橋報告では、鞘口部分の佩裏に窓があり、そこへ単脚足金物の佩用装置がつくと想定する。今回、この窓の有無を精査したが、佩用装置とみられた窓は、玉縁部分を残して、破損した箇所が偶然窓のようにみえたものと判断した（第22図）。

鍔の表面には木質がみられ（図版10）、鞘木は鞘口金具の端部にまでおよんでいたと考えられる。

鞘中筒金具は金銅製で断面倒卵形であり、両端に玉縁がつく。その作りは鞘口金具と同様に、銅板の両端を折り曲げて玉縁を作り、それを筒状に丸めて鑲付けし、鍍金したものと考えられる。

鞘尻金具は現在失われているが、高橋報告では、実測図付で次の記述がある。「鞘金具はすべて金銅で、鞘口と鞘尻と二の足に接する胴金と三ヶ所だけある。（中略）鞘尻にはそれに接して責が一個ある。内部に鞘の木が遺存してあり、図の如く末端から鉄鉾が一本打込んである。この面に当たった金銅の板が欠失したのであろう。」この記述から、金銅製の筒状の鞘尻金具⁽¹⁾があり、鞘尻に鉄製の蟹目釘が打たれていた。鞘尻板は欠損していたようだが、他の類例からすると、金銅板ではなく、鹿角などの有機質のものか、またはもともたなかったとみられる。

刀身の幅は元幅3.2cm、先幅3.1cmであり、背の厚さは錆で膨らみ、現状で1.0～1.3mmである。刀身表面の肌は錆で膨らむが、鑄はみられず平造りである。切先はフクラ付きである。

茎は、X線画像でも判然とせず、肉眼での観察所見である。破損した柄間断面でみると、茎は錆膨れによる破損が著しい。関は、X線でも肉眼でも判然としない。背区は鍔の堰板の折返しがほとんどみえないことから、ないとみられる。その一方で、刃区は鍔の堰板の折返しが顕著にみとめられるので、片関とみられ、撫角関の可能性が高い。

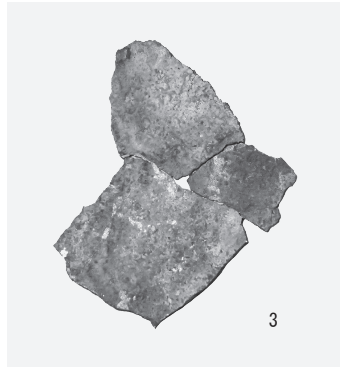
柄木は、刀身が片関で、茎が柄間の背側に大きく寄ることから、落とし込み法による可能性が高い。鞘木は、断片が刀身に付着して残るのみで、鞘木の表面の状況をうかがえる部分はない。

3は、2.3×1.9cmの銀板の破片である（第23図）。厚さは0.2～0.3mmと薄い。わずかに反りがあり、所在不明の銀装柄頭の破片かもしれない。

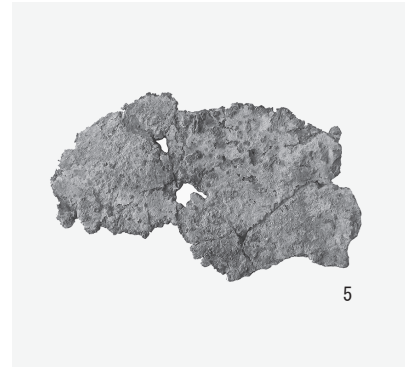
この他にも金銅装大刀に関連する破片が2点ある（第21図）。これらは、銀装円頭大刀とは別個体



第22図 鞆口筒金具の破損部



第23図 銀板の破片



第24図 金銅板の破片

の大刀のものの可能性がある。以下、その概要を記す。

4は、長さ12cm、幅2cmの鞆木の残片である。その表面には金銅板に打ち込んだ唐草文の列点がある。また、一部に列点文のある金銅板の残片も残っている。鞆木片の端部には直径3.5mmの孔がある。鞆木加工時の仮留め用の釘の孔とみられる⁽²⁾。唐草文はJと逆Jを交互に連続させて、その隙間に沿わせてJの形に沿って列点を打つ。列点のピッチは5mmの間に6つの点を打つ。この鞆木片は、列点文とその類例から考えて、金銅板で鞆の佩裏を包み込むタイプのものである。これが銀装円頭大刀にともなうものだとすると、鞆の全面を金銅板で覆っていたことになるが、そうした破片はみあたらない。銀装円頭大刀とは別個体のものと考ええる。

5は、4.3×2.5mmの金銅板の破片である(第21・24図)。厚さは0.6mmで、文様はまったくなく顕著なカーブもない。全面が緑青で覆われるが、本来は金銅製であろう。銀装円頭大刀の装具の一部としては該当部分が想定できない。

この4と5は、銀装円頭大刀とは別個体の金銅装大刀の破片と考えられるが、この個体の他の破片がまったく知られていないため、はたしてこれらが古天神古墳の出土品としてよいのか疑問が残る。

(2) 大刀(第25～30図、第3表、図版8・11)

破片の状態では保存されていたので、接合と個別別分類をおこなった。個体数は関部を基準とし、分離した切先、茎尻がどれにともなうかを検討した。その結果、7振ないし8振(銀象嵌装大刀1振を含む)の大刀があることを確認した。以下では、各個体を大刀A～Gと呼び、分離した切先、茎尻がどれにともなうかを記載する。大刀の部分名称は〔臼杵1984〕に準拠する。

大刀A 3は切先以外の刀身から茎尻までが接合するが、これと同一個体になりそうな切先片はない。残存長88.7cm、刀身残存長70.9cm、茎長15.8cmである。刀身は幅3.4～4.0cm。刀身は錆膨れによる変形が少なく、断面はきれいな三角形で平造りであることがわかる。関は角ばった撫角片関である。茎は幅2.0cmから1.5cmと茎尻に向けて細くなり、茎尻は隅抉で尖る。茎の背は、先端付近でゆるく内湾する。茎尻から4.2cmと13.0cmの位置に径6mmと7mmの2つの目釘孔がある。目釘は残っていない。刀身、茎ともに鞆木や柄木の木質がまったくみとめられず、布痕跡もない。拵えを一切つけない状態で副葬されたものであろうか。

大刀B 6は刀身幅がもっとも大きな個体である。これにともなう切先・刀身はその幅から4・5の可能性が高い。茎尻は7と12が候補となるが、7はサイズの他に他にあう大刀がなく、これを6の破片と想定しておく。すべてをあわせた残存長は85.2cm、刀身残存長71.7cm、茎残存長20.4cm、刀身幅は3.1～4.4cmとなる。刀身部は錆膨れがあまりなく、鑄のない平造りであることが観察できる。

茎の目釘孔は3つある。刀身部には鞘木の木質はまったくみられない。以下、破片ごとに詳細を記す。

4は残存長12.0cmの切先片である。フクラ付きで先幅3.1cm、背の厚さは0.3cmである。

5は残存長41.9cmの刀身片である。幅は3.7～4.2cm、背の厚さは0.9cmである。

6は関部の破片である。刀身部残存長17.8cm、茎残存長7.7cmである。刃幅4.1～4.4cm、背厚さ1.1cmである。関は斜角関である。鉄製の鍔片が残り、長さ1.7cmで柄側の縁は玉縁状に厚くなる。堰板の部分は錆で覆われるが、堰板はあると考えられる。茎の元幅2.8cmである。

7は残存長12.7cmの茎の破片である。幅は2.0cmから1.3cmと茎尻に向けて細くなる。茎尻は隅抉尻の一種だが挟りは弱く、先端は尖る。茎尻から2.5cmと10.0cmに2つの目釘孔があり、径は佩表側が6mm、佩裏側が4mmで佩表側から穿孔したとみられる。

大刀C 9は茎尻から刀身半ばまであり、鉄製の鐔と鍔がつく。残存全長44.2cm、刀身幅は3.0～3.6cm、断面は錆膨れが少なく断面三角の形状をよく保つ。鑄のない平造りである。関は両関だが刃区がわずかに広い。茎は長さ12.2cm、幅2.3cmから1.4cmと茎尻にかけて細くなる。茎尻は一文字尻で、茎尻から1.8cmと7.2cmに2つの目釘孔があり、径は佩裏側で6mm、佩表側で3mmである。鐔は鉄製板鐔で半分が欠損するが倒卵形と推定され、短径4.9cm、厚さ0.4cmを測る。柄木の腐朽によりずれている。透かしや象嵌はない。鍔は長さ1.6cm、長径4.0cm、短径2.5cmで、堰板がある。鐔の柄側には柄縁の貴金具である厚さ5.5mm、断面方形の鉄環がはめられている。刀身部には木質はまったく確認できない。9にともなう切先は、その幅から8または10と考えられるが決め手はない。

大刀D（銀象嵌装大刀）11は鉄製の鍔・鐔・柄縁貴金具に銀象嵌をほどこした大刀である（第26図、図版11）。鐔の端には、この大刀とは別のものの木質が錆着している。

関は不均等両関で、直角関である。背区は鍔の材の厚み程度しかない。茎は、茎元幅2.4cm、残存する先端で1.9cmと細くなる。茎元には、幅6mmの方形の挟りがある。

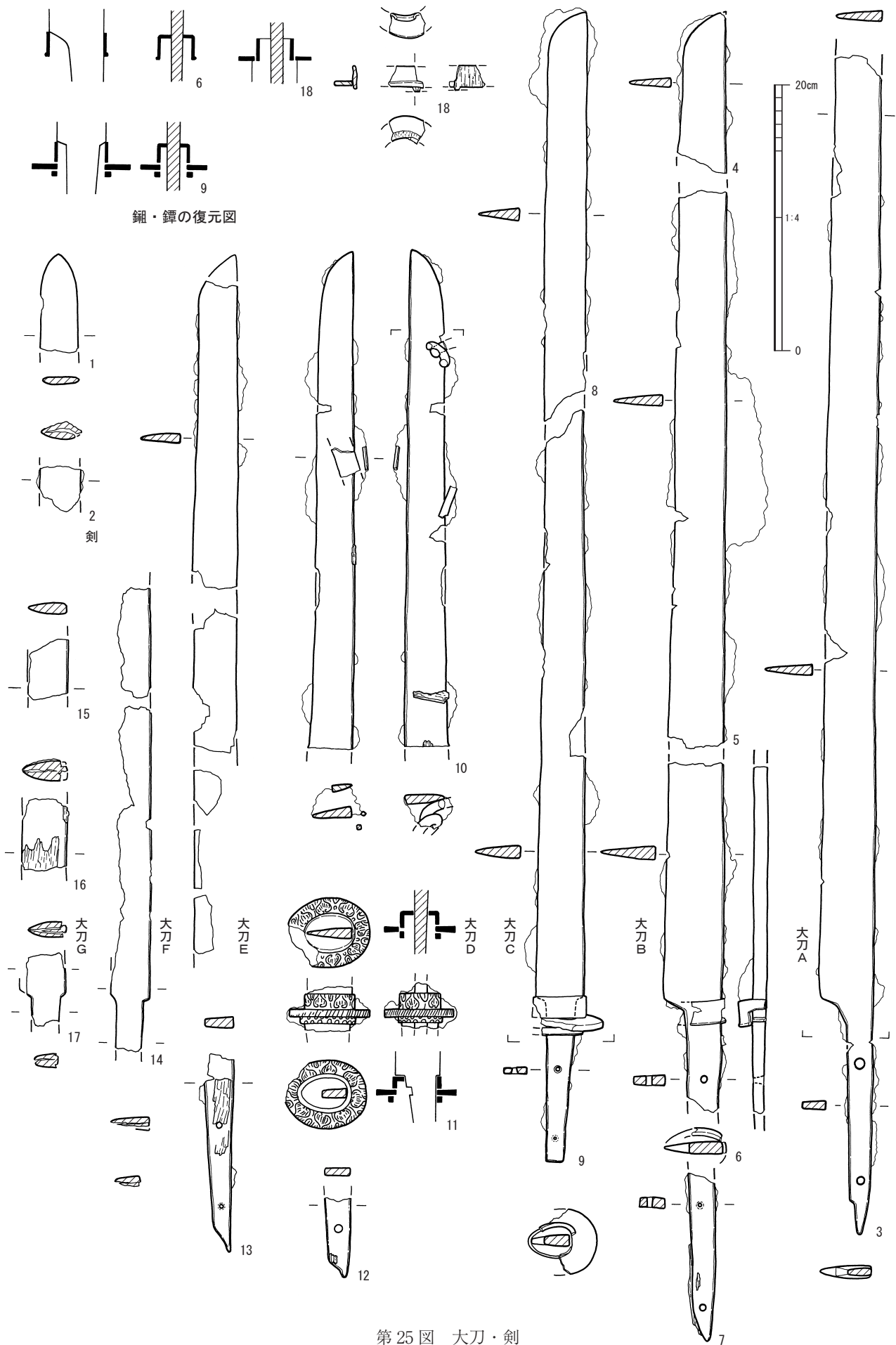
鐔は長径6.0cm、短径5.4cmの楕円形である。鐔の厚さは5mmだが、内縁よりも外縁がわずかに厚い。鍔は厚さ2～3mmで長さ1.3cm、長径3.6cm、短径5.4cmで鐔と同じ楕円形である。柄縁には太さ5×6mmの断面方形の貴金具がある。長径4.1cm、短径3.1cmでその形状は下端が尖る倒卵形であり、鐔・鍔とは形状が異なる。茎の背は柄縁貴金具に接しており、茎は落とし込み法で柄木に装着されたと考えられる。

象嵌は、鍔、鐔、柄縁貴金具にほどこされている。鐔は、耳の部分を斜線で埋め、鐔の両面はハート形文を刻む。刃側の面にはハート形文が8単位あり、柄側の面は欠損するが6単位が確認できる。ハート形文の中は6単位ないしは7単位の弧線で埋め、周囲はU字形、単純な直線・弧線で埋める。鍔の側面も6単位のハート形文が描かれ、中と外を弧線で埋める。柄縁貴金具の側面は交互半円文〔瀧瀬・野中1996〕で埋められている。象嵌のタガネ溝の形状は、CT画像の銀線からU字形と考えられる。深さは約0.5mm、銀線の幅は約0.5mmである。

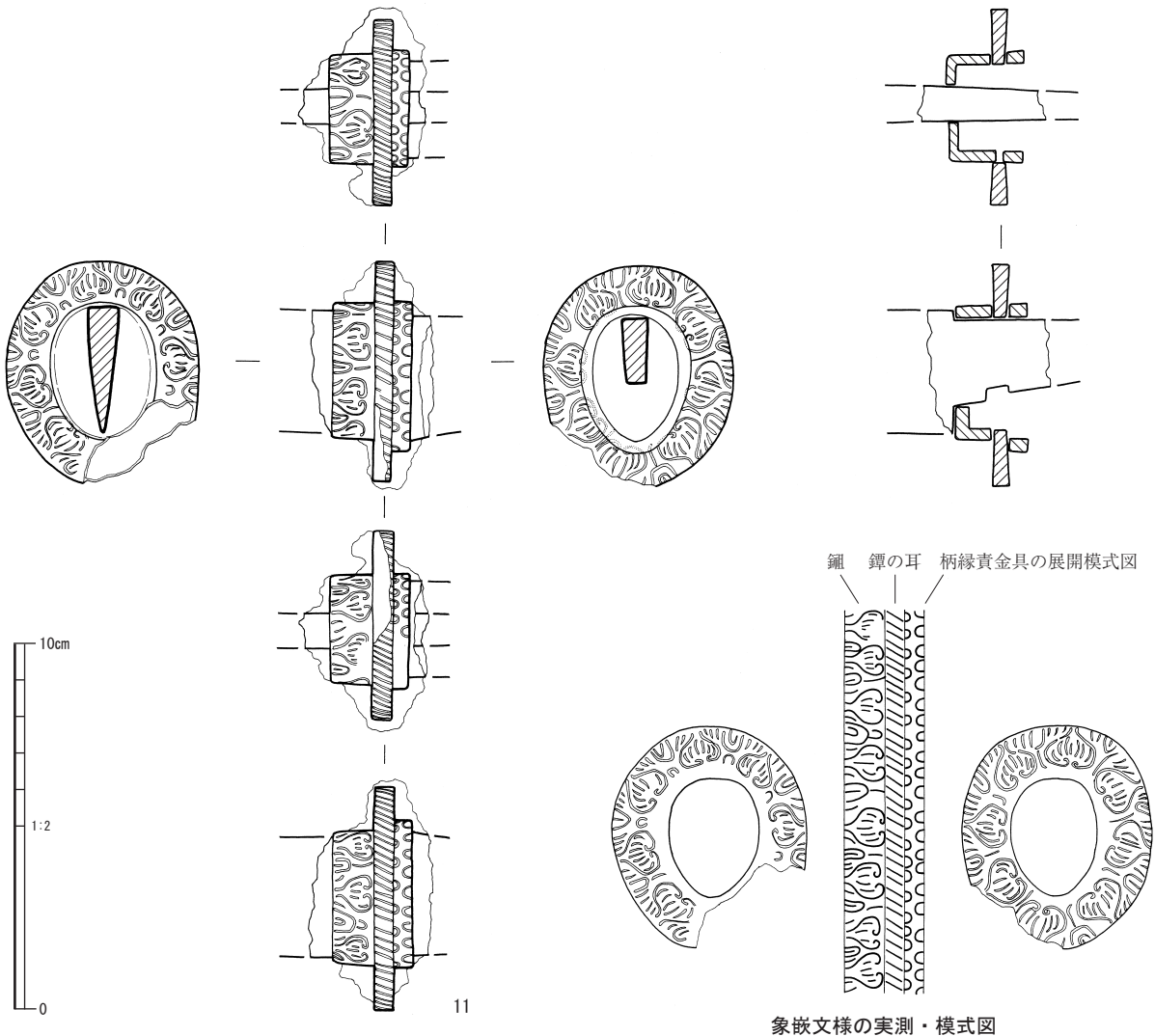
11にともなう茎尻は、7か12が考えられるが、7は6にともなう可能性が高いため、12が銀象嵌装大刀にともなうことになる。しかし、7・12ともに隅抉尻である。隅抉尻は片関の大刀に一般的にみられるため、7と12のいずれも11にはともなわないかもしれない。その場合、12を茎尻とする大刀がもう1振存在することになる（この場合、大刀は8振となる）。

12は残存長5.9cmの茎尻の破片である。幅1.9cmから茎尻1.5cmと細くなり、厚さは0.6cmである。隅抉尻で、茎尻から3.8cmの位置に径6mmの目釘孔1つがある。

大刀E 破損が著しいが、板に針金で括りつけられて保管されており、同一個体であることがわかる。茎尻は欠損していたが、島根大学蔵の破片と接合した。ただし、関部などは破損がひどく、本



第25図 大刀・剣



第26図 銀象嵌装大刀（大刀D）

来の形状を知ることができない。また、刀身部もきちんと接合できたわけではないので、全長は現在の板の上に置かれた状況での数値である。切先を欠損するが、フクラであることがわかるため、推定復元すれば全長は約75cmの大刀となる。刀身は、平造りで鑄はない。関の形状は破片がなく不明である。茎は残存長14.4cm、元幅2.1cm、茎先端は1.3cmと中細である。茎尻は隅抉尻で先端は尖る。目釘孔は茎尻から3.5cmと10.0cmの位置に2個ある。径は表側が4mm、裏側が3mmと明らかに裏側が小さい。茎には木質がはっきりと遺存するが、刀身には木質はみとめられない。

大刀F 刀身から茎の途中の破片である。銹で表裏と中の3枚に分離する。残存長34.2cm、刀身の刃部は欠損し、かろうじて関付近にかすかに残る。刀身幅2.9cmの細身の刀である。鑄はなく平造りである。関は両関で、背側は垂直に直角関だが、刃側は撫関である。茎は元幅2.0cmであり細くならない直茎のようである。

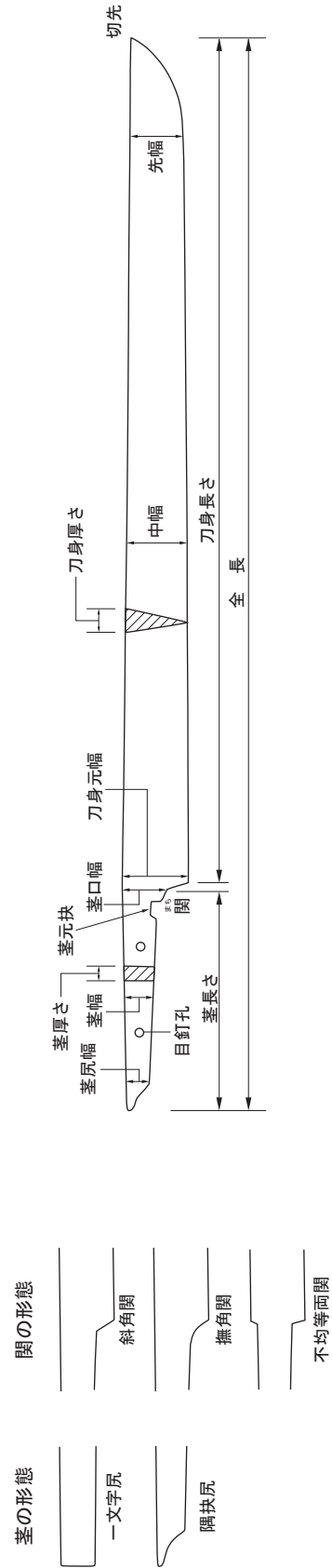
大刀G 15～17は刀身と関部の長さ5cm程度の小片である。3枚に剥離しかけている銹の状況や刀身幅などから同一個体と考えた。刀身は幅3～3.4cmである。厚さは良好なところで1.0cmである。銹膨れのため、鑄の有無はわからない。16には木質が遺存している。17の関部の破片は、刃が欠損するが、斜角関の不均等両関である。

個体が特定できない破片 大刀A～Gのどの大刀の破片か特定できない切先、茎尻について記す。

第3表 古天神古墳に副葬された大刀

個体番号	破片番号 (第25図)	全長	刀身部						茎部				形態			備考			
			長さ	先幅	中幅	元幅	厚さ	長さ	口幅	中幅	尻幅	厚さ	目釘孔	目釘孔径	切先		刀身	形態	莖尻
銀装凹頭大刀		(78.9)	71.2	3.1	3.5	3.2	1.0~1.3	(7.7)	2.5	2.4	-	0.8	-	-	フクラ	平造り	撫角か	-	銀製の柄頭と金銅製の筒金具
大刀A	3	(88.7)	(70.9)	3.4	3.6	4.0	9.0	15.8	2.0	1.8	1.5	0.7	2個	0.7 0.6	-	平造り	撫角	隅扶尻 中細	茎・刀身ともに柄木・鞘木の 木質なし。
大刀B	4・5・ 6・7	(85.2)	(71.7)	3.1	4.2	4.4	0.9~1.1	20.4	2.8	2.0	1.3	0.7~1.0	3個	0.35<0.6	フクラ	平造り	斜角	隅扶尻	鉄製の莖らしき ものか銹着。
大刀C	9	(56.7)	(44.2)	-	3.0	3.6	9.5~1.1	12.2	2.3	1.6	1.4	6.5	2個	0.3<0.6	-	平造り	不均等 両関	一文字尻 中細	鉄製板鐔、鐔、柄縁の責金具。 刀身に木質なし。
大刀D	11	-	-	-	-	3.3	0.9	(2.6)	2.4	1.9	-	6.5	-	-	-	平造り	-	-	鐔、鐔、柄縁責金具に銀象嵌 装。莖元に方形の袢りあり。
(大刀CかDにとまなう)	8	(30.8)	(30.8)	2.9	3.1	-	0.9~1.0	-	-	-	-	0.7	-	-	フクラ	平造り	-	-	刀身に木質なし。
(大刀CかDにとまなう)	10	(37.5)	(37.5)	26.5	3.2	-	0.6~0.9	-	-	-	-	-	-	-	フクラ	平造り	-	-	背にわずかに木質付着。轡、 鉄鍔、小刀が銹着。
(大刀BかDにとまなう)	12	-	-	-	-	-	-	(5.9)	-	0.9	0.5	0.6	-	0.6	-	-	-	隅扶尻 中細	木質付着
大刀E	13	約75	(59.0)	2.9	3.2	-	0.8	(14.4)	2.1	1.7	1.3	0.35、0.9	2個	0.3<0.5	フクラ	平造り	-	隅扶尻 中細	刀身に木質なし。 莖には木質あり。
大刀F	14	(34.2)	(30.6)	-	-	2.9	(0.7)	(3.6)	2.0	1.9	-	(0.8)	-	-	-	平造り	両関 (直角・撫角)	-	板に釘金でとじ付けて保存。
大刀G	15・ 16・17	-	-	-	3.0	(3.0)	1.0	(2.3)	2.1	-	-	0.9	-	-	-	不明	不均等 両関	-	刀身に木質あり。

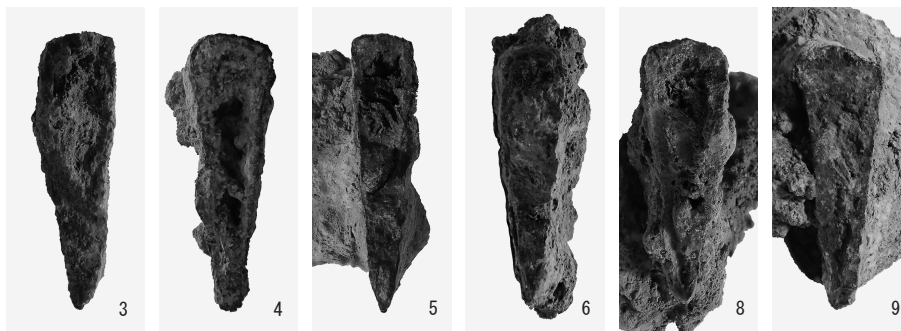
〔凡例〕 計測位置については、第27図を参照。() の数値は現存値、- は不明であることをあらわす。単位はcm。



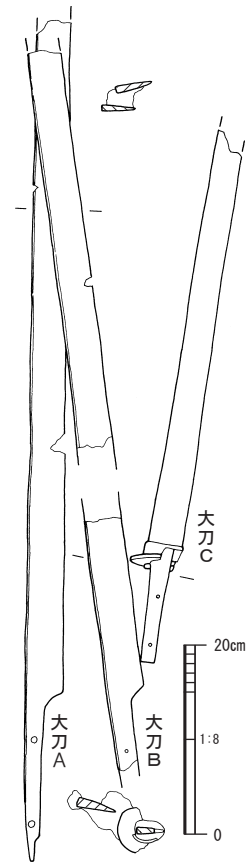
第27図 大刀の形態分類と計測位置



第28図 鏑と鏢



第29図 刀身断面



第30図 大刀の錆着状況

8は切先を含む30.8cmの破片である。刀身幅2.9～3.1cmで、大刀Cか大刀Dにとまうと考えられる。切先はフクラである。錆の影響の少ない部分で観察すると平造りで鏑はない。

10は切先を含む37.5cmの破片である。刀身幅は2.7～3.2cmで、大刀Cか大刀Dにとまうと考える。切先はフクラ付きであるが、他の大刀に比べ細くて尖り気味（フクラ枯れ）である。錆の影響の少ない部分で観察すると平造りで鏑はない。刀身の両面に轡の引手片、短刀の刀身部片（短刀10）、長頸鏃の頸部片が錆着する。木質は背に1.5cmほど付着するが、この大刀の鞘木であるかはわからない。

18は鉄製の鏑と鏢の破片である。鏢・鏑ともに厚さ3～4mmと薄い。全体径の1/5が残存する。鏑は長さ1.5cmで鏢が鏢の中にはまっている。鏑の内面と鏢の柄と接する縁には木質が遺存している。

19は大刀の小片（図なし、図版8-2）。残存長8.0cm、幅2.4cm。

副葬状態の復元 大刀の刀身部に鞘木と判断される木質が付着するのは、大刀Gのみで、大刀A・B・C・E・Fの刀身には木質がまったく観察できない。このことからこれらの大刀は鞘を抜いた状態で副葬されていた可能性がある。また、大刀A・B・Cは、切先をそろえて錆着しており（第30図）、刀身片10には、短刀、鉄鏃、馬具の破片が錆着している。このことから、大刀、小刀、鉄鏃、馬具が同じ場所に集めて置かれていたことが推測される。

（3） 剣（第25図、図版8）

2片ある。身幅がほぼ同じであり、同一個体の可能性が高いと判断した。

1は切先片である。錆膨れは少なく、鏑はみられない。残存長7.3cm、幅2.9cm、厚さ0.6cm。

2は身である。錆で大きく膨れている。残存長3.4cm、幅3.0cm、厚さは錆膨れして1.4cmである。

(4) 短 刀 (第31図、図版12-1)

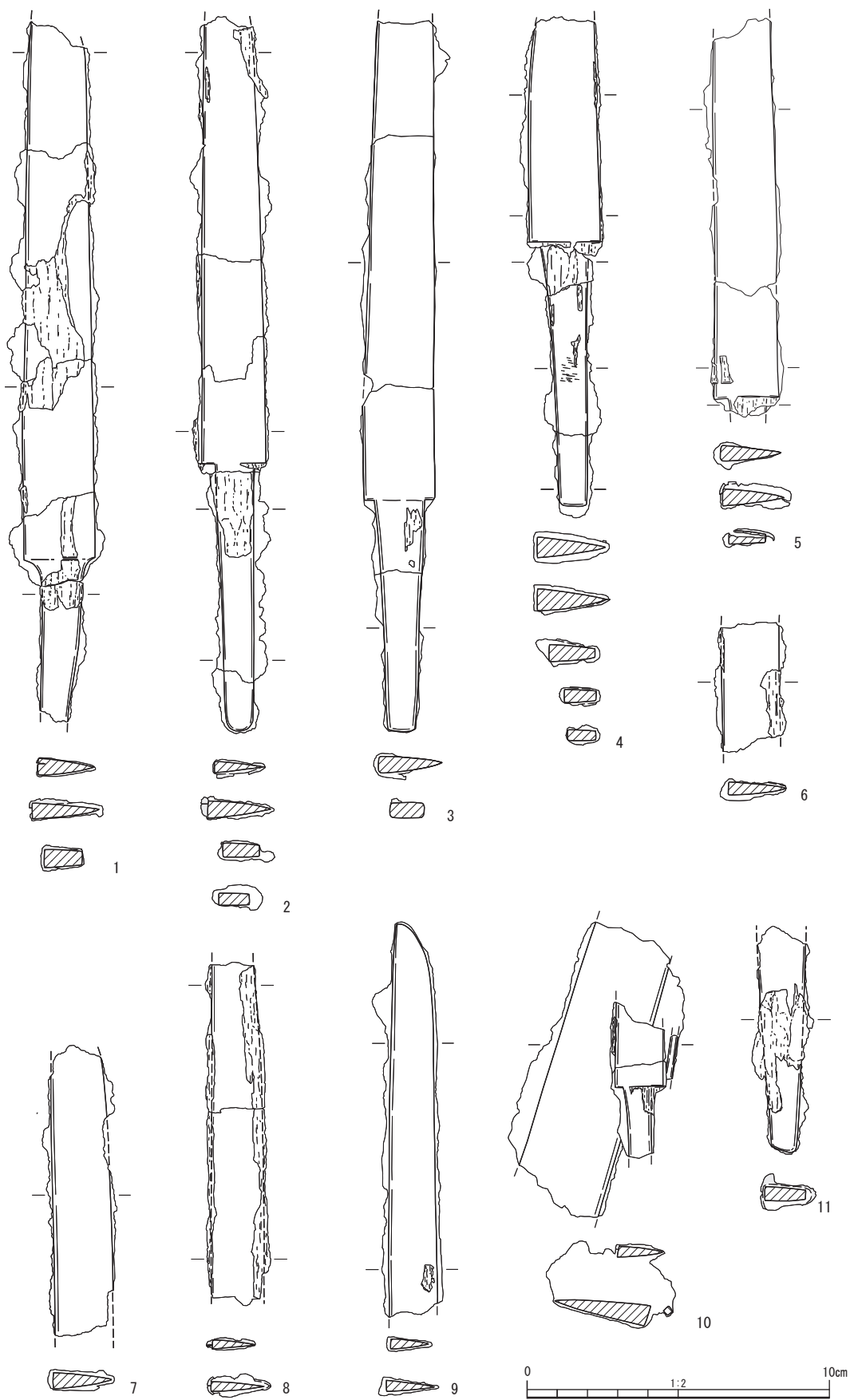
11点を確認しており、すべて東京国立博物館所蔵である。両関かつ片刃で、刀子と比較して、長く直線的な刃部を有し、茎部の長いものを短刀とする。破損しているものがほとんどであるが、比較的残りが良好な例では、刃部長は11cmを超え、茎部長は5.5cmを上回り、いずれも刀子と比べて長大である。また、刃部幅が2cmを超える幅広のもの、2cmに満たない幅狭のものがみとめられる。本体はいずれも鉄製である。装具については、有機質の残りが良好な例から、小口に穿孔した孔に茎部を差し込んで装着する一木造りの柄を装着し、二枚合わせの木鞘におさめられていたとみられる。

1～5は刃部幅の広いものである。いずれも刃部から茎部にかけての破片で切先は欠損する。1は現存長23.1cm、刃部長17.8cm、茎部長5.3cm、刃部幅2.3cm、茎部幅1.4cm、厚さ5.5mmを測る。関はナデ角を呈する。茎尻は欠損する。刃部には木質が遺存し、部材の合わせ目が確認でき、二枚合わせの鞘とわかる。茎部には柄の木質が遺存する。柄の木質と鞘の木質はそれぞれ関部で途切れており、柄と鞘の境を確認できる。2は現存長23.6、刃部長14.8cm、茎部長8.8cm、刃部幅2.1cm、茎部幅1.3cm、厚さ5.5mmを測る。関は直角を呈する。茎尻が残存し、丸くおさめる。刃部に木質が遺存し、部材の合わせ目が確認できるため二枚合わせの鞘とわかる。茎部には、柄の木質がみとめられる。柄の木質は関部で途切れるが、鞘の木質は刃部の途中でとまっており、柄と鞘の境に1mm程の隙間がある。3は現存長23.5cm、刃部長15.8cm、茎部長7.7cm、刃部幅2.4cm、茎部幅1.6cm、厚さ5.5mmを測る。関は直角を呈する。茎尻が残存し、四角くおさめる。茎部には柄の木質が遺存し、関部で途切れる。4は現存長16.1cm、刃部長7.4cm、茎部長8.7cm、刃部幅2.3cm、茎部幅1.6cm、厚さ7mmを測る。関は直角を呈する。刃部の反りが背側から腹側に向かっており、本来とは逆である。茎尻が残存し、四角くおさめる。茎部には長軸に直交する繊維状の材が巻きつけられ、その上に長軸に平行する木質が付着する。繊維を巻きつけた上から柄を装着し、脱落を防いだ可能性がある。柄の木質は関部で途切れる。5は現存長13.2cm、刃部長12.5cm、茎部長0.7cm、刃部幅2.1cm、茎部幅1.3cm、厚さ5.5cmを測る。関は直角を呈する。茎部は大きく欠損する。刃部には鞘の木質が遺存する。部材の合わせ目が確認でき二枚合わせとわかる。また、茎部には柄の木質がみとめられる。柄の木質は関部で途切れるが、鞘の木質は刃部の途中でとまっており、柄と鞘の境に5mm程の隙間がある。

6～10は刃部幅の狭いもので、6～9は刃部の破片、10は刃部から茎部の破片である。6は現存長4.3cm、幅1.9cm、厚さ4mmを測り、刃部中央部分の破片である。鞘の木質が付着する。7は現存長9.6cm、幅1.9cm、厚さ5mmを測り、切先は欠損する。8は現存長11.3cm、幅1.7cm、厚さ3mmを測る。切先は欠損する。木質が遺存し、合わせ目が確認できることから二枚合わせの鞘である。9は現存長12.9cm、幅1.6cm、厚さ3.5mmを測り、切先が残存する。小片だが木質が遺存しており鞘の痕跡と考えられる。10は、現存長5.2cm、刃部長2.8cm、茎部長2.4cm、刃部幅1.55cm、茎部幅0.9cm、厚さ3.5mmを測り、刀破片10(大刀Cか大刀D)と銹着する(第25図-10)。刃部は大きく欠損し、茎尻も欠損する。関は直角を呈し、刃部には鞘の木質が残る。茎部には柄の木質が遺存し、関部で途切れる。

11は、茎部の破片で現存長7.5cm、幅1.5cm、厚さ5mmを測る。茎尻が残存し、四角くおさめる。幅広の刃部をもち、大振りの個体であった可能性がある。遺存する木質に合わせ目や溝はみとめられないため、小口に穿った孔に茎部を差し込む一木造りの柄であったことがうかがえる。

関の残る個体は6点みとめられる。刃部のみ残る個体のうち、平面形態や刃部幅、厚さから7～9は別個体で6と7は同一個体の可能性がある。また、6～9の刃部幅は10の刃部幅よりも広く、茎部のみ残存する11の幅に対しては狭いため、6～9と10・11は別個体と考える。副葬点数は少なくとも10点以上となる。



第31图 短 刀

(5) 鉄 鏃 (第32・33図、図版12～14)

鉄鏃は、破片資料を含めて計53点みられる。そのうち、46点が東京国立博物館所蔵品、7点が島根大学所蔵品である。鏃身部が26点、頸部関が18点みられることから、鉄鏃は少なくとも26個体以上はあったと考えられる。長頸鏃は長頸柳葉形鏃14個体、短頸鏃は短頸長三角形鏃3個体、短頸ナデ関柳葉形鏃3個体、短頸腸袂柳葉形鏃5個体、有茎方頭形透鏃1個体である。

① 東京国立博物館所蔵品

『大正七年埋蔵物録三』の記述からみて、1915(大正4)年に出土したことが確実な一群である。

長頸柳葉形鏃(1～41) 長い頸部をもち鏃身部が柳葉形を呈する個体であり、鏃身部からみて14個体が確認できる。鏃身部は細長く、側縁は直線的な形態である。鏃身部断面形態は、すべて表面から研ぎ出された片丸造、鏃身関は角関である。残存する頸部関の12点は棘状関、2点は台形関である。それぞれの鏃身部との対応関係は不明である。茎部には矢柄の木質が付着しており、樹皮が巻かれた痕跡も一部で確認できる。鏃身部長2.6～2.8cm、残存頸部長約6.0cm、残存茎部長3.4cmである。

短頸長三角形鏃(42～44) 短い頸部をもち、鏃身部が長三角形を呈する個体である。3個体が確認できる。鏃身部は側縁がわずかに内彎して鏃身関に至る。鏃身部断面形態は平造であり、表裏の両面から刃が研ぎ出される。鏃身関は角関である。頸部は長頸鏃と比べると幅広く、頸部関は棘状関である。茎部の大部分は欠損している。鏃身部長4.2～4.5cm、頸部長2.2cm、残存茎部長1.4cmである。

短頸ナデ関柳葉形鏃(45～46) 短い頸部をもち、鏃身部が柳葉形、鏃身関がナデ関を呈する個体である。鏃身部は側縁が内彎して鏃身関に至る。鏃身部断面形態は平造であり、表裏の両面から刃が研ぎ出される。頸部途中より下は欠損しているため、頸部関はわからない。鏃身部長3.5cmである。

② 島根大学所蔵品

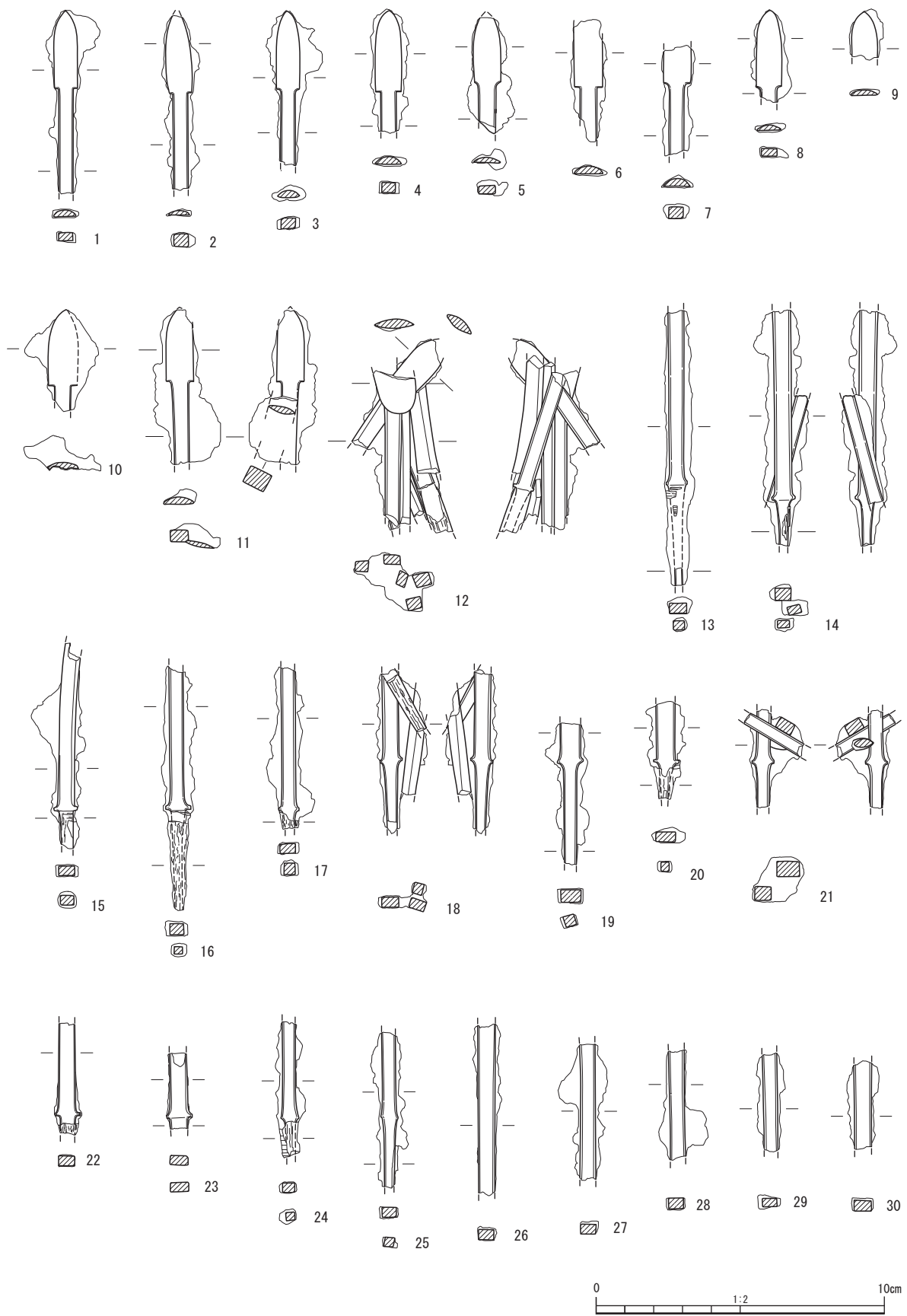
出土経緯がわからない一群である。古天神古墳出土とされる島根大学所蔵鉄刀と東京国立博物館所蔵鉄刀が接合したことにより、島根大学所蔵の鉄鏃も古天神古墳出土品である可能性が高まった。

短頸腸袂柳葉形鏃(47～51) 短い頸部をもち、鏃身部が柳葉形、鏃身関に腸袂をもつ個体である。5個体が確認できる。鏃身部は側縁がS字状に彎曲しており、鏃身関に向けて広がりを見せる。鏃身関には0.5～1.3cmの深い腸袂をもつ。腸袂の先端にはどれも面がみられ、先端が切り取られたようになっていいる。鏃身部断面形態は両丸造であり、表裏の両面から刃が研ぎ出される。長頸鏃と比べて幅広い頸部を経て、頸部関に至る。頸部関は台形関である。他形式の鉄鏃に棘状関が多いことと対照的である。茎部に至るとやや薄くなる。残存率の高い47は、鏃身部長5.7cm、頸部長2.9cm、残存茎部長0.5cmである。

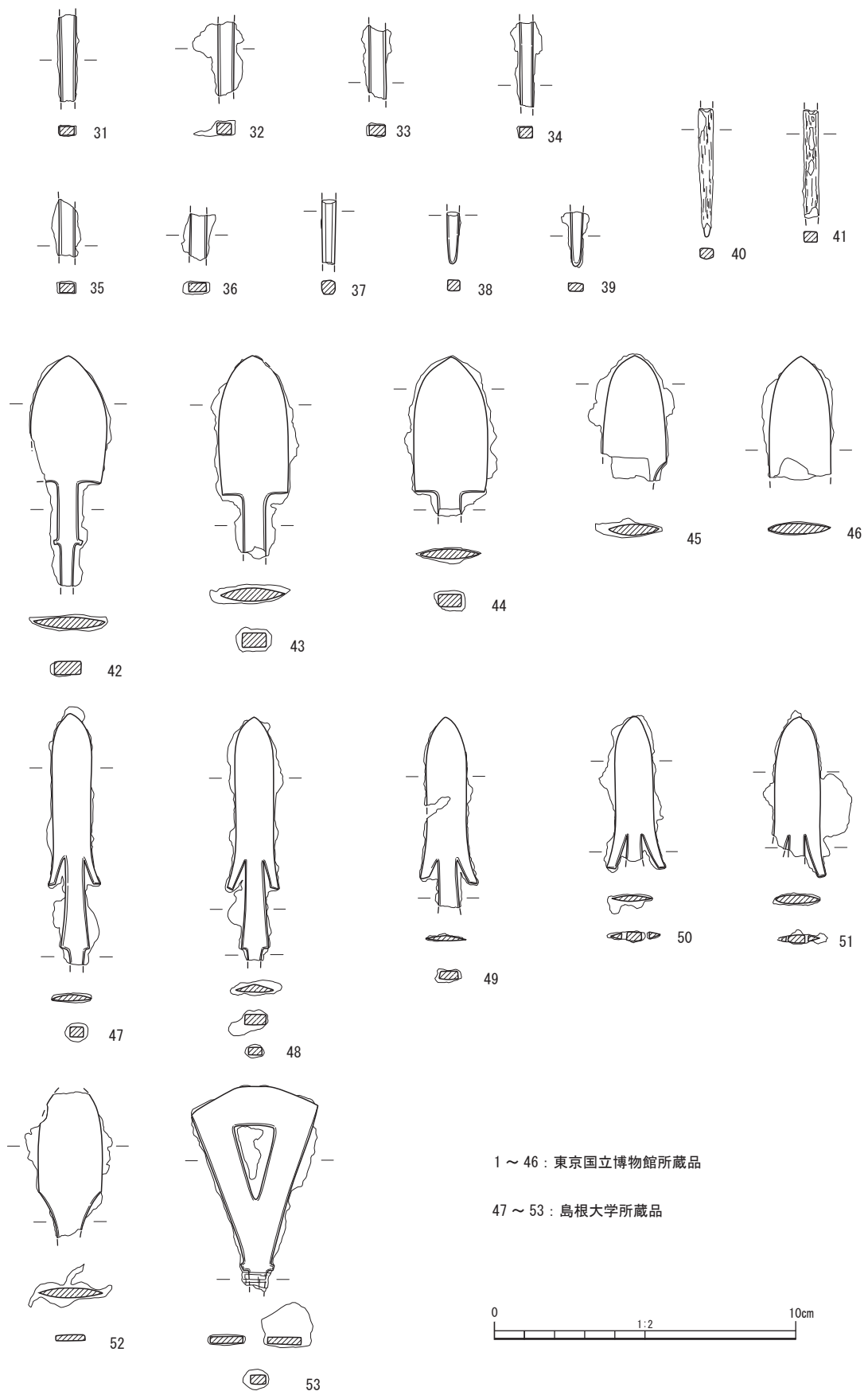
短頸ナデ関柳葉形鏃(52) 短い頸部をもち、鏃身部が柳葉形、鏃身関がナデ関を呈する個体である。45、46と同形式のものであろう。残存鏃身部長3.3cm、残存頸部長1.5cmである。島根大学所蔵品と東京国立博物館所蔵品で共通する唯一の形式である。

有茎方頭形透鏃(53) 鏃身部先端に幅広の刃部をもち、鏃身下半がV字形を呈する個体である。通常、方頭形鏃先端の刃部は直線的であるが、本例は先端の刃部が山形に突出しており、いわゆる圭頭形鏃と方頭形鏃の中間の形態である。鏃身下半には逆三角形の透孔をもつ。鏃身下半の関には棘状関がみられ、茎部に至る。茎部には矢柄の痕跡がみられる。鏃身部先端長1.0cm、鏃身下半長5.1cm、残存茎部長0.7cmである。

島根大学所蔵品には長頸鏃はみられず、すべて短頸鏃、有茎鏃である。この点は東京国立博物館所蔵品と異なっており、出土経緯を考えるうえで留意すべき点である。



第32図 鐵 鏃 (1)



第33図 鉄 鍬 (2)

5 農工具

農工具は、刀子9点と砥石1点を確認した。

(1) 刀子 (第34図、第4表、図版15-1)

両関かつ片刃であり、刃部長は11cm程度、茎部長は5cm程度におさまるものを刀子とした。関が残存する例はいずれも直角を呈する。刃部は、短刀に比べて曲線的で刃関に向かって反りをもつ。また、刃部中央の幅が1.5cm未満と狭く、刃部長が10cmに満たない小振りなものと、刃部中央の幅が1.5cm以上と広く刃部長が10cmを超える大振りなものがみとめられる。いずれも本体は鉄製である。

小振りのものは、1～5の5点で1・2が東京国立博物館所蔵、3～5が島根大学所蔵である。1・2は刃部中ほどの破片である。切先は欠損するが先端に向かい刃に反りがみられることから切先に近い部分である。3～5は刃部から茎部にかけての破片で、いずれも切先と茎尻は欠損する。4は先端に向かい刃に反りがみられるため、切先に近い部分と判断できる。5は刃の途中で屈曲がみとめられる点特徴的である。

大振りのものは6～8でいずれも東京国立博物館所蔵である。6・7は刃部の破片である。6は切先が残存するが、刃部中ほどから関側が欠損しており刃部長は不明である。刃部中ほどの幅が1.5cmと広いと、大振りのものと判断した。7は切先を欠損するが、刃が先端に向かって反りをもつため切先に近い部分の破片であろう。8は茎尻が残存しており、四角くおさめる。切先は欠損するが、先端に向かい反りがみられるため切先に近いとわかる。

9は刃部から茎部にかけての破片で、東京国立博物館所蔵である。刃部は刃関側の一部が遺存するのみで、大きく欠損する。刃部幅や刃部長は不明で、大振りか小振りかの判断は困難である。

1・2・6・7の刃部には鞘の木質が遺存する。2・6は、部材の合わせ目のみとめられるため、二枚合わせの鞘である。7に付着する木質は関側の途中で途切れており、鞘の端が確認できる。いっぽう、4の刃部には材が判然としない有機質が付着する。木材でなく革等の鞘が装着されていた可能性がある。

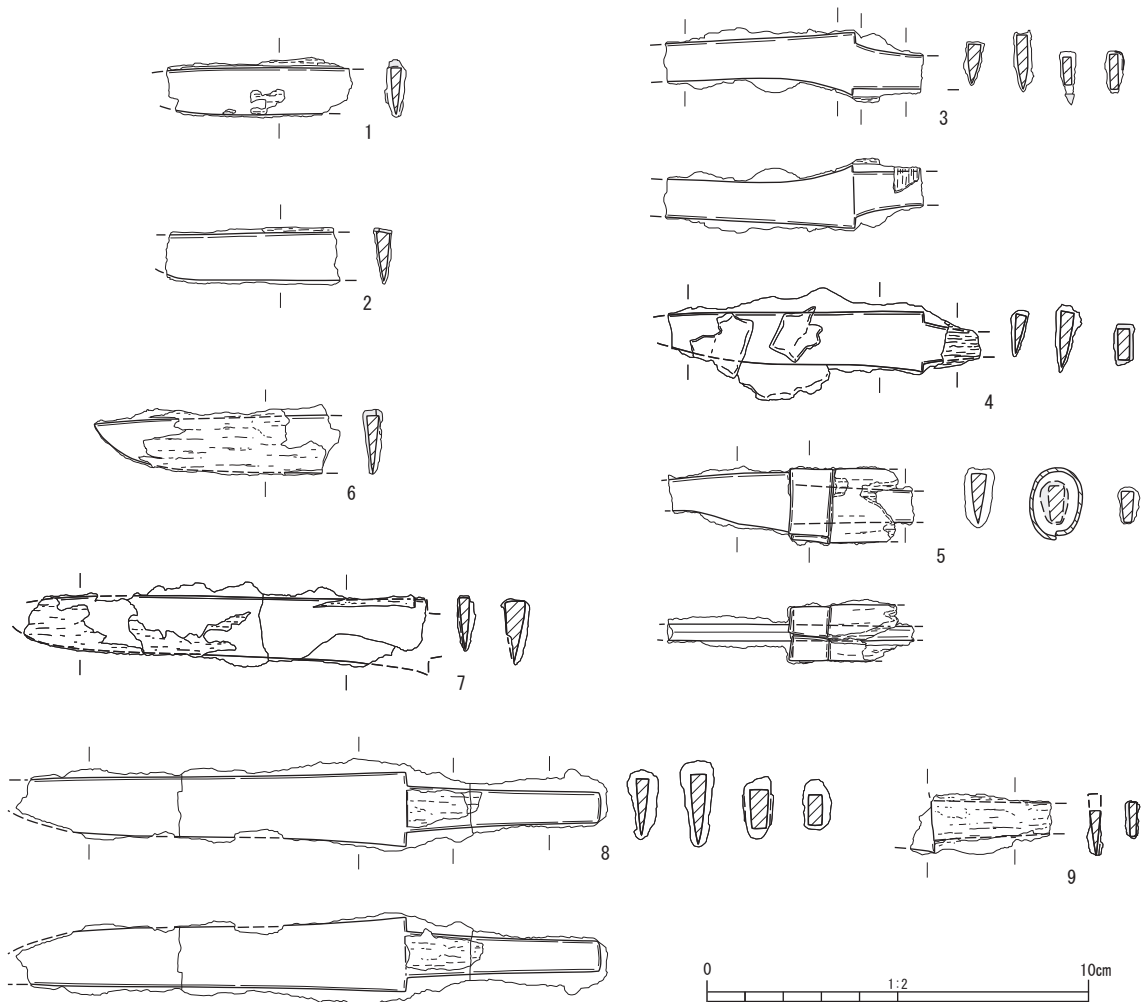
3～5・8・9には、柄の木質が遺存する。木質の残りが良好な4・5・9に部材の合わせ目や溝はみとめられず、小口に穿った孔に茎部を差し込んで装着する一木の柄が装着されていたとわかる。とくに5の木柄は、残りが良好で表面が残存する。柄の最大幅は2.0cm、最大厚は1.5cmを測る。また、刃部側の一回り細く削り出した部分に鉄製の口金が装着され、腹側に合わせ目がみとめられる。3・5・8・9の木質は関で途切れており、柄の端とわかる。また、3の茎部には長軸に直交する樹皮状の材が付着する。柄の脱落を防ぐために樹皮状の材を茎部に巻いた後に、柄を装着した可能性がある。

関の残る個体は5点あり、幅や厚さ、形態から1・2・6・7が3～5・8とは同一個体とは考えられない。また、刃関のみ残存し刃部が大きく欠損する9と刃部のみ残存する1・2・6のいずれかは、同一個体の可能性がある。以上の点から、少なくとも8点以上が副葬されていたと考える。

(2) 砥石 (第35図、図版15-2)

1点を確認している。既報告や東京国立博物館台帳にも記載はなかったが、今回の調査で東京国立博物館にほかの遺物とともに所蔵されていることを確認した。収蔵状況から、1915年に石室から出土し、他の遺物と一括して所蔵された可能性が高い。c面に「古天神」と筆による朱書きがあり、収蔵後の整理の際に注記されたと考えられる。

石材は泥岩とみられ、灰白色を呈する。断面は方形を呈するとみられるが、両端面を欠損する。現状で全長4.7cm、最大幅3.5cm、最大厚1.9cmを測る。残存部分では幅に変化はみとめられず、ほぼ一定である。a・b・c面は部分的に平滑な箇所がみとめられ、いずれも長軸方向に擦痕が残る。石材の粒子は非常に細かく、a・b・c面の平滑な部分の目はサンドペーパーの4000番ほどで非常に滑らかである。d面は欠損しており、使用状態の確認ができない。

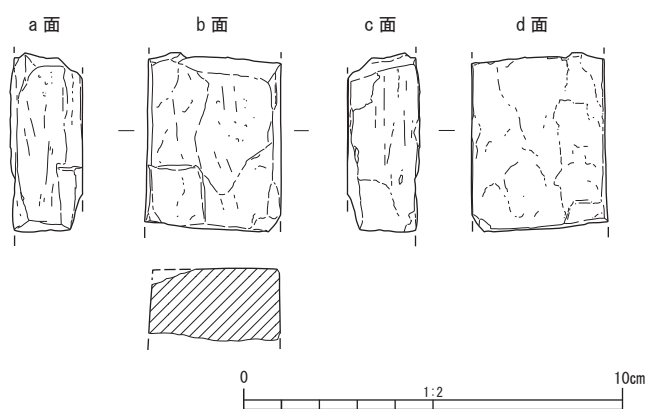


第34図 刀子

第4表 刀子計測表

遺物番号	現存長	刃部長	茎部長	刃部幅	茎部幅	厚さ
1	4.9	4.9	-	1.2	-	0.3
2	4.5	4.5	-	1.2	-	0.35
3	6.8	5.0	1.8	1.7	1.15	0.3
4	8.1	6.7	1.4	1.6	1.05	0.3
5	6.4	3.2	3.2	1.6	1.1	0.45
6	6.45	6.45	-	1.5	-	0.3
7	10.5	10.5	-	1.7	-	0.5
8	15.4	10.3	5.1	1.9	1.2	0.5
9	3.7	0.6	3.1	-	-	0.3

〔凡例〕 単位：cm。 -：不明。



第35図 砥石

6 馬 具

いずれも細片と化していたが、接合関係の検討をおこなったところ、品目と数量を確定できた。古天神古墳から出土した馬具としては、環状鏡板轡2点、雲珠1点、辻金具3点を確認できる（第36～38図、図版16・17）。

環状鏡板轡A（第36図、図版16） いわゆる素環の轡で、小型矩形の造付（鍛接）立間金具をもつ個体である（1～7）。舌形鈎金具が付属する。細片化と錆化が著しく銜の大部分を欠損しており、遺存状態は良好ではない。いずれの破片も東京国立博物館の所蔵である。

鏡板は太さ8～9mmほどの断面が多角形に近い鉄棒からなる幅約8cm×高さ約7cmの楕円形の環体に、幅2～2.5cm程度×高さ約1.5cmの矩形の立間がとりつく（4～6）。立間には環体から約2～3mmの位置に幅1.2～1.6cm×高さ7～8mmの上辺がやや弧状を呈する方形孔があげられ、舌形鈎金具が挿入される。

舌形鈎金具は3鉾留めの鉄地金銅張りを幅約1.5cm×長さ約7.5cmにわたってほどこし、金銅装の末端に責金具がともなわない形式とみられる（1～3）。残存しないため、鉾頭の金銅装の有無は不明である。鈎金具の鈎部は長さ7cmにおよぶ。

引手は柄部を太さ約8mmの断面方形の材とし、径約2.8cmの引手壺は断面多角形に近い材からなる。引手長は約18cmで柄に強い捩りを加えず、柄と引手壺を約45度に屈曲させるくの字引手である。

銜は直径約3.0cmの銜先環が遺存するのみだが、材の断面形は楕円形に近いものである（4・7）。

鏡板・銜・引手の連結は銜先環に引手と鏡板をともに搦め、引手と鏡板は連結されない。

環状鏡板付轡B（第37図、図版17-1） いわゆる素環の轡で、大型矩形の造付（鍛接）立間金具をもつ個体である（8～14）。部位が断片的にしか確認できず遺存状態も悪いが、材の断面形態など各部の特徴が共通することから同一個体と判断した。東京国立博物館所蔵の破片が主体をなし、一部（10・13）が島根大学所蔵の破片である。

鏡板は太さ約7mmの断面隅丸方形の鉄棒からなる幅約10cmの楕円形の環体に、幅3.7cm程度×高さ約2.0cmの矩形の立間がとりつく（8・9）。立間には環体から約4mmの位置に幅2.4cm×高さ8mmの上辺がやや弧状を呈する長方形孔があげられる。

引手は柄部が太さ約7～8mmの断面方形の材であるが、径約3.0cmの引手壺は環内面側が断面多角形、環外面側は円形を呈する（10・11）。引手長は遺存状態が悪く、不明である。柄と引手壺を約45度に屈曲させるくの字引手である。

銜は直径約3.1cmの銜先環のみが残存し、材の断面形は隅丸台形に近いものである（12～14）。

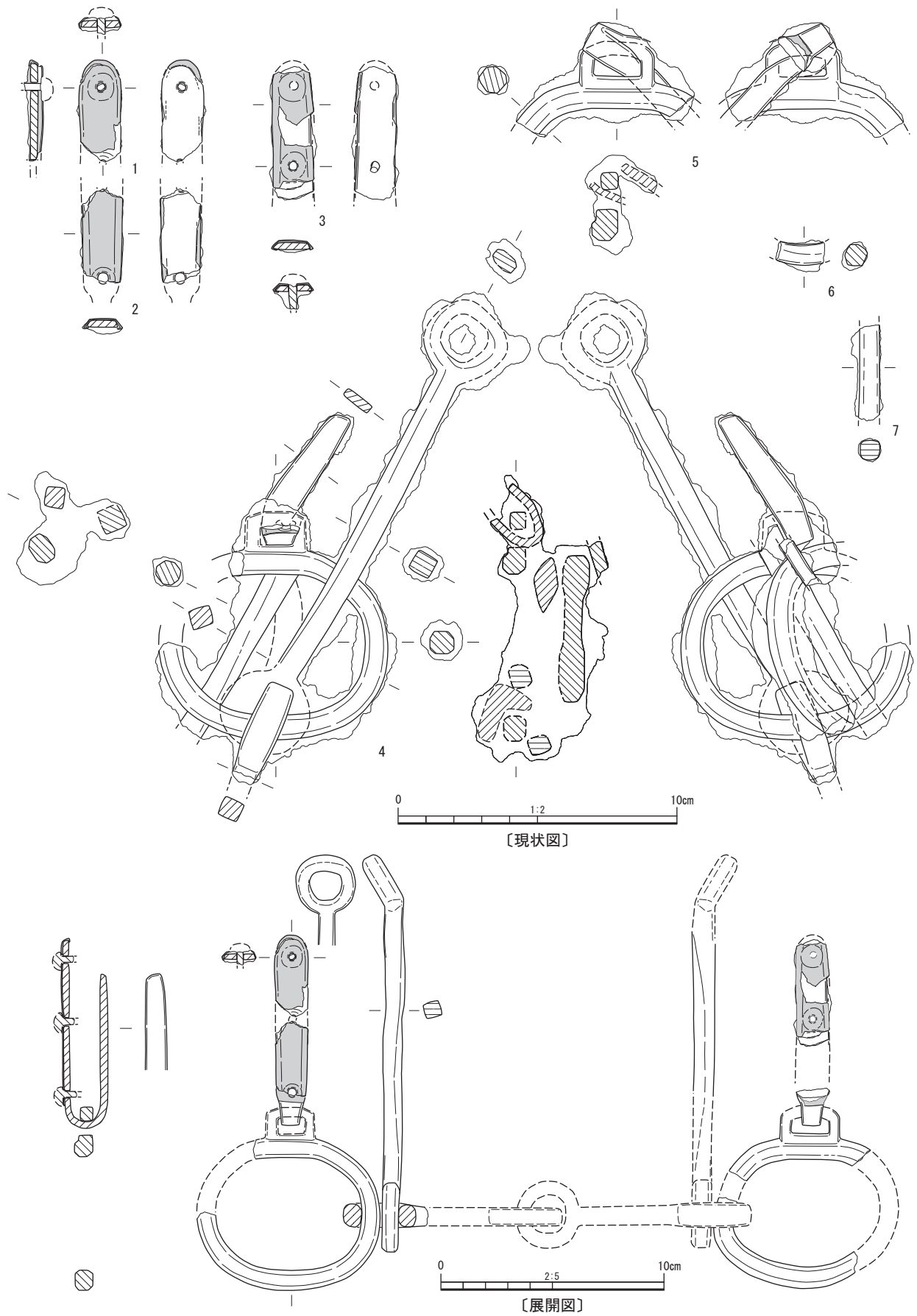
鏡板・銜・引手の連結は銜先環に引手と鏡板をともに搦め、引手と鏡板は連結されない。

雲 珠（第38図、図版17-3） 鉄地金銅装の半球状鉢多脚系雲珠である（21～24）。細片化が著しく、遺存状態はきわめて悪いが、接合すると1点となる。大部分は東京国立博物館の所蔵だが、これと同一個体とみられる脚の破片1点（24）のみ島根大学の所蔵である。全体像を破片の図上復元によって推定すると、直径8cm程度、高さ3.5cm程度となる。

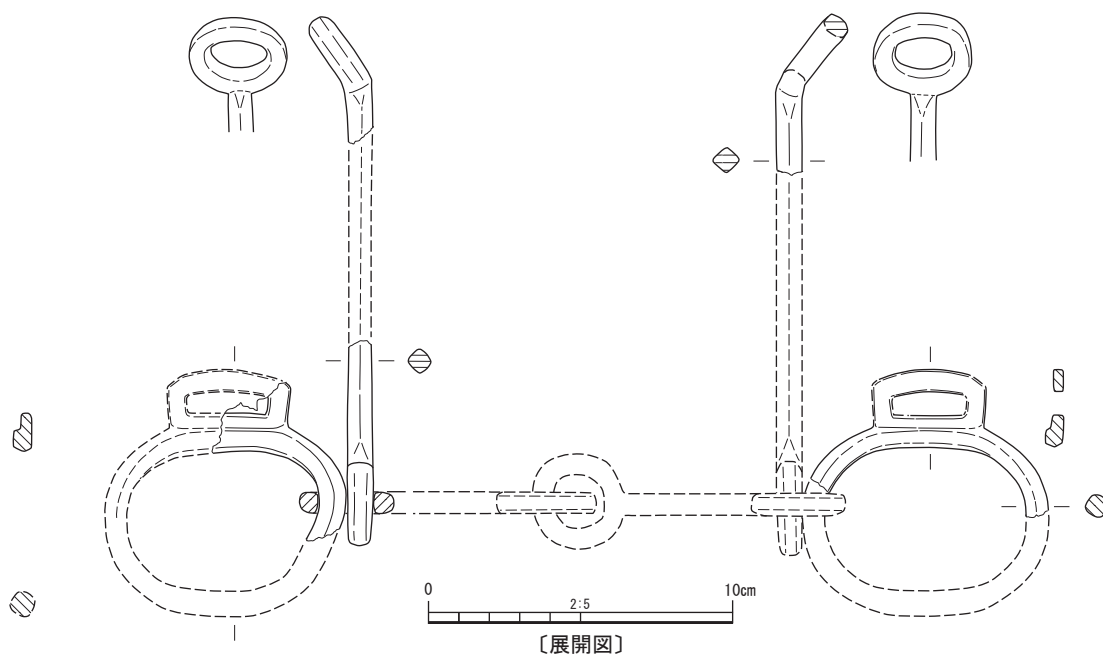
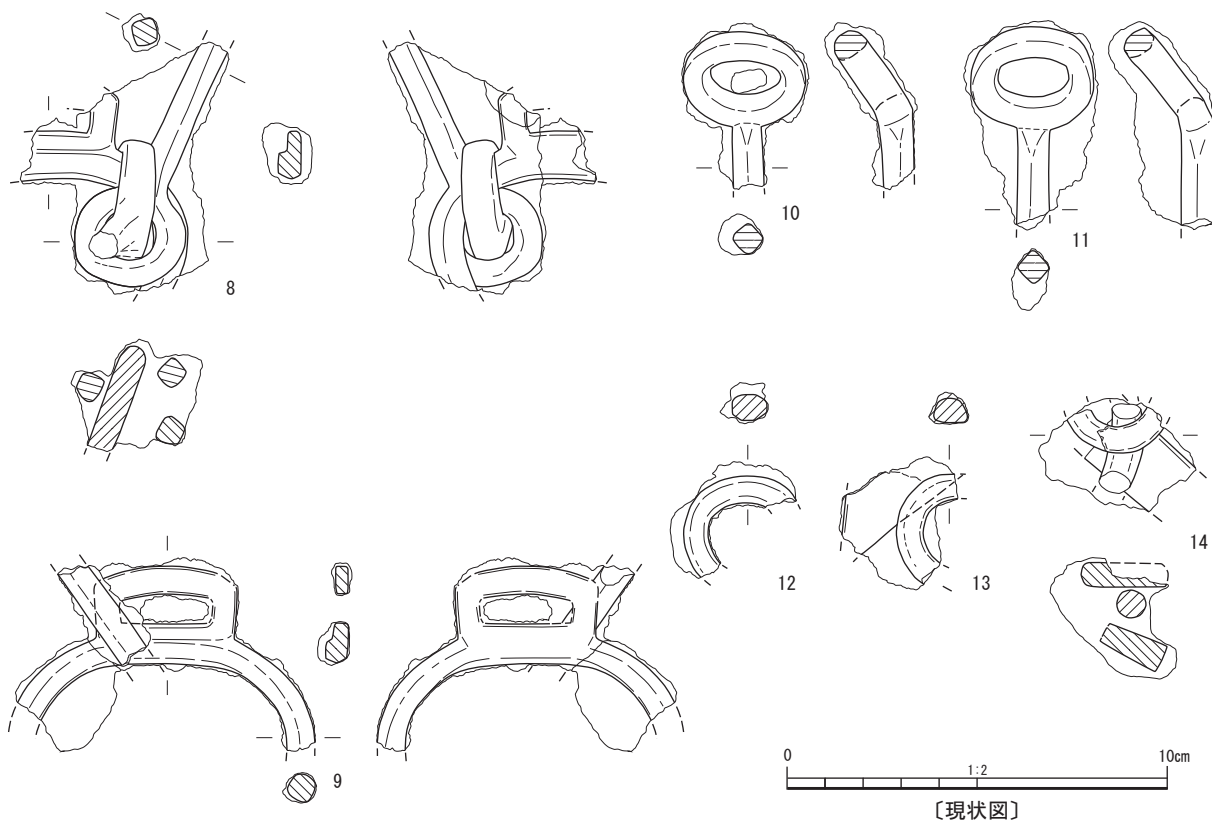
鉢部は頂部に宝珠飾のない半球形を呈し、稜はない。側面に4条の浅い凹線をめぐらす。鉢部の直径は約8.1cm、高さは約3.4cmである。

脚数は8脚に復元される。脚は尖頭形をなし、長さ約2cm、幅1.8～2.0cm程度である。脚には鉾を1つ打ち、基部に太さ約2mmの責金具を1本巻く。

辻 金 具（第38図、図版17-2） 雲珠とセットなる鉄地金銅装の半球形鉢辻金具である。3点



第36図 馬具〔環状鏡板付轡A〕

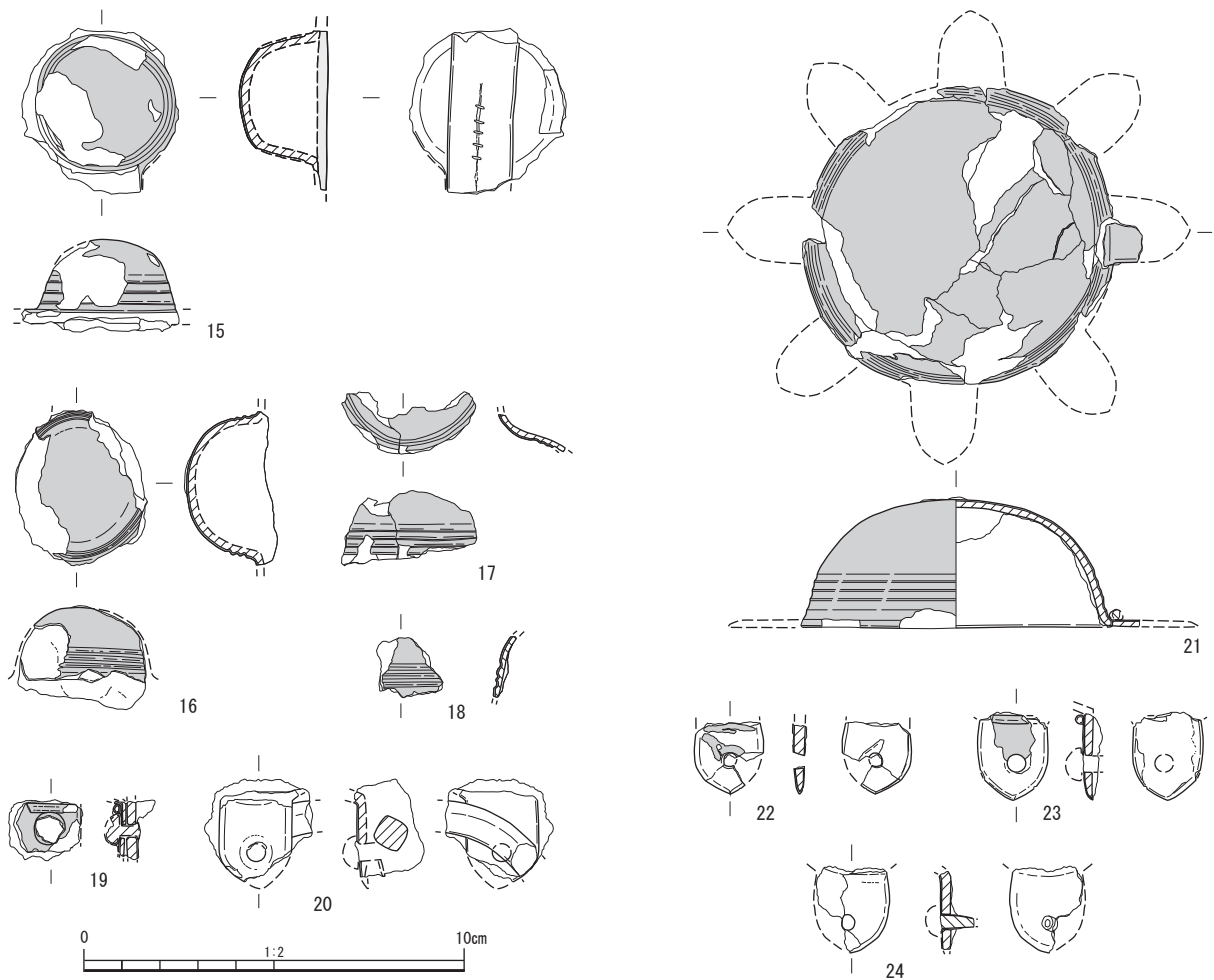


第 37 図 馬具〔環状鏡板付轡 B〕

が現存し、いずれも東京国立博物館が所蔵する（15～20）。

鉢頂部に宝珠飾のない半球状を呈し、稜はない。側面に3条の浅い凹線をめぐらす。鉢部の直径は3.5cm程度、高さは2.5cm程度である。

脚は4脚を四方に等間隔に配置する。脚は尖頭形をなし、長さ約2.2cm、幅1.8～1.9cm程度である。



第38図 馬具〔辻金具・雲珠〕

脚には径8mmほどの金銅装の鋌を1つ打ち、基部に太さ約2mmの責金具を1本巻く。

なお、15の下面には革帯が錆化して残存する。1枚の革帯の両端を折り返して袋状にし、中心で両端を縫い合わせた状況が確認される。

馬具の組み合わせ 古天神古墳から出土した馬装は、轡の数から2セットが存在したことが確実である。しかし、これにともなうそのほかの馬装は少ない。金属製品の馬具としては、ほかに金銅装雲珠1点と金銅装辻金具3点以上が確認されているが、これらは細部の意匠やつくりの共通性から同じ馬装を構成したものと判断でき、1セット分しか存在しないと考えられる。

小型矩形造付立聞金具をもつ環状鏡板付轡（轡A）は舌形鉤金具に金銅装をほどこす点から、大型矩形造付立聞金具をもつ環状鏡板付轡（轡B）より装飾性が高い。装飾性の高さから、轡Aが金銅装雲珠・辻金具と同じ馬装を構成した可能性が濃厚である。金銅装舌型鉤金具がともなう小型矩形造付立聞金具をもつ環状鏡板付轡と、責金具をもつ1鋌脚と凹線による腹部装飾の金銅装鉢部半球形雲珠・辻金具からなる、古天神古墳とほぼ同様の馬装の例として、島根県御崎山古墳〔大谷（編）1996〕や、福岡県川島古墳〔小方・森・石山・酒井1982〕、福岡県竹原古墳〔嶋田（編）1991〕などがある。また、型的に近い馬装は、栃木県星の宮神社古墳〔岩淵・大橋・田代1986〕や千葉県法皇塚古墳〔小林・熊野（編）1976〕にもある。以上の点から、古天神古墳では轡Aと金銅装雲珠・辻金具が同じ馬装を構成し、轡Bはそれとは別の馬装を構成する可能性を指摘できる。

7 土 器

1915年の古天神古墳発見後に東京国立博物館へ寄贈された資料に含まれる土器は、第1表のとおり、蓋坏5点、高坏1点、臙1点、蓋及脚付埴1点、提瓶2点、埴輪・須恵器片一括（内、須恵器3点、軟質土器2点）である〔高橋1919、本村1981、渡辺2013〕。県からの上申書に記された図面には、土器は玄室内の屍床外で発見されたとある〔渡辺2013〕。野津左馬之介は、『鳥根県史』で上記に加えて「小埴付埴残欠」を記しているが〔野津（編）1925〕、これは東京国立博物館に所蔵されている松江市西谷町牛切会場古墳出土の出雲型子持壺を混同した可能性が高い。その後、1964年および1968年に採集された須恵器が鳥根大学に所蔵されており、高坏坏部1点、高坏脚部2点、直口壺1点（11・12・14・16）と、直口壺あるいは臙の胴部と思われる破片が1点ある。このうち11・14・16は1964年採集品、12と破片1点は1968年の採集品である。また、本庄考古学研究室により1964年か1967年に須恵器が2点採集され、本報告書作成を機に鳥根大学に寄託されているが、この資料はどちらも鳥根大学所蔵の高坏2点（11・14）と接合することが判明した。鳥根大学所蔵資料は前方部西側の崩落部分で採集したとされており〔角田1993〕、本庄考古学研究室採集資料も同じ場所で採集された可能性が高い⁽³⁾。この他、鳥根県埋蔵文化財調査センターで所蔵されている恩田清氏採集資料に坏等の器種と思われる須恵器小片が1点ある。本報告では、実見の機会を得難い東京国立博物館所蔵土器については小片も含め全点報告し、他機関所蔵須恵器については小片以外を報告する。

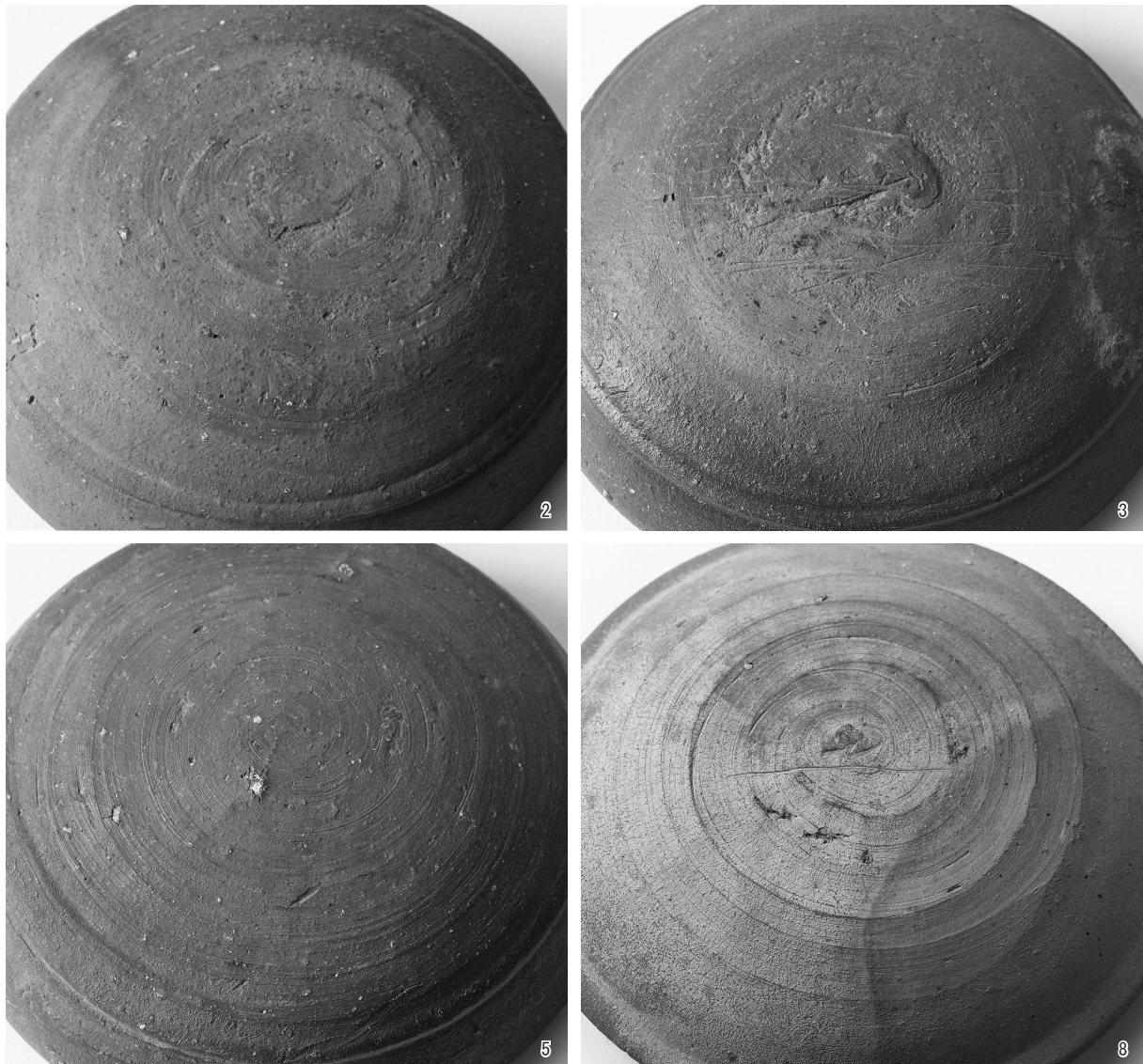
(1) 須 恵 器 (第39～42図、図版18～21)

蓋 坏 蓋・身各々5点ある。1～5は蓋である。1は口径がもっとも大きく13.5cmを測る。天井部外面の回転ヘラケズリは浅くかつ粗く、中心部以外にもケズリ残しがみとめられる。肩部には2条の細い沈線がほどこされるが、明瞭な稜をなさず、2条の沈線間は突帯状を呈する。口縁端部内面にはやや太い沈線がめぐり、沈線以下がやや薄く段状にもみえるが大谷分類β類に近い⁽⁴⁾。天井部内面には不定方向のナデがみとめられる。2は口径12.7cmを測る。天井部は中心から回転ヘラケズリをほどこすが非常に粗く、削り残しが多い。肩部には2条の沈線がめぐり、部分的に稜をなすようにもみえるが、突帯状を呈する。口縁端部内面には高い位置に浅い沈線がめぐり、沈線上部がやや肥厚するため段状を呈する。α3類。天井部内面には直交する方向の静止ナデをほどこす。3の口径は12.8cm。天井部は中心から回転ヘラケズリをほどこすが、非常に粗いため削り残しが多く、複数方向に切り合った板状工具の圧痕がみられる。肩部は2と同様に2条の沈線がめぐり一部は稜状を呈する。口縁端部内面には凹線状の太い沈線がめぐる。β類。天井部内面には一定方向の静止ナデがみとめられる。4と5は口径が12.1cmと小さく、調整も類似する。天井部の回転ヘラケズリは範囲も広く丁寧ほどこされ、ケズリ残しはほとんどない。肩部は下方に沈線が1条めぐり、その上部は回転ナデによる凹みにより屈曲部が作出される。天井部内面には静止ナデをほどこす。口縁端部内面は4と5でやや様相が異なり、4は細く浅い沈線がほどこされるが部分的にナデ消されており、α4あるいは5類。5は浅い沈線の上部がやや肥厚しており、沈線の位置が低い部分ではやや段状を呈するが、大部分は沈線がめぐるβ類。蓋は角田が整理しているとおおり、口径や調整の類似から1、2・3、4・5の3群に区分される〔角田1993〕。

6～10は身である。6は、歪みが大きいものの受け部径13.7cm、口径12.0cm程度で、たちあがり高は1.05cmを測る。底部外面のケズリ残しは少ないが回転ヘラケズリはやや粗く、中央部分にはヘラ切りの痕跡を残す。底部内面には静止ナデがみられる。7は受け部径13.45cm、口径11.8cm、たちあ

がり高 1.05cmを測る。底部外面の回転ヘラケズリは丁寧だが、中央部分はヘラ切りの凹凸がありケズリ残す。8は受け部径 13.2cm、口径 11.55cm、たちあがり高 1.05cmを測る。底部外面にはやや強く丁寧な回転ヘラケズリが、内面には静止ナデがほどこされる。なお、7と8の底部外面にはヘラ記号がある。9は受け部径 13.05cm、口径 11.35cm、たちあがり高 0.85cmを測り、底部外面の回転ヘラケズリは中央からほどこされるが非常に粗く、ケズリ残しがとても多い。回転ヘラケズリ後に部分的に静止ナデもほどこされる。底部内面には静止ナデがみとめられる。10は受け部径 12.65cm、口径 11.3cm、たちあがり高 0.8cmを測る。底部外面の回転ヘラケズリは中心からほどこされるが浅く、板状工具の痕跡がみとめられる。9と10は口径やたちあがり高、底部に丸みをもつ器形が共通する。身も角田の指摘どおり、口径やたちあがり高、器形から6～8と9・10の2群に区分される〔角田 1993〕。

蓋と身のセット関係についても、角田が指摘するとおり、すべてがセットをなすものではない〔角田 1993〕。口径からは1と6～8がセットとなりうるが、ケズリの様相や歪み具合などを勘案すると1と6が組み合う可能性が高い。2・3は口径から9・10とのセット関係がうかがわれる。とくに3と10には天井部・底部外面に板状工具による痕跡がみとめられるという共通点があり、組み合う

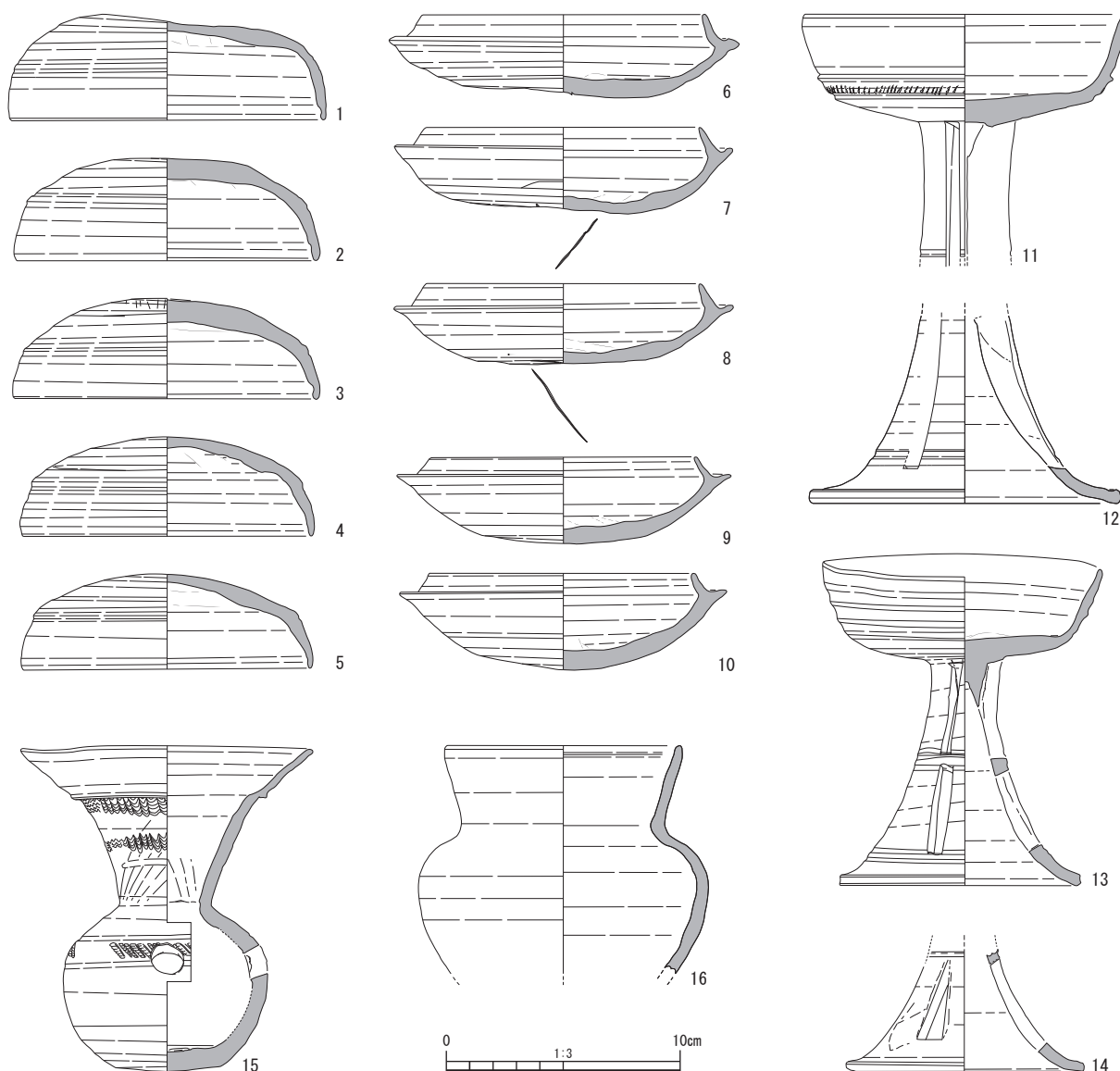


第 39 図 蓋坯の回転ヘラケズリと板状圧痕

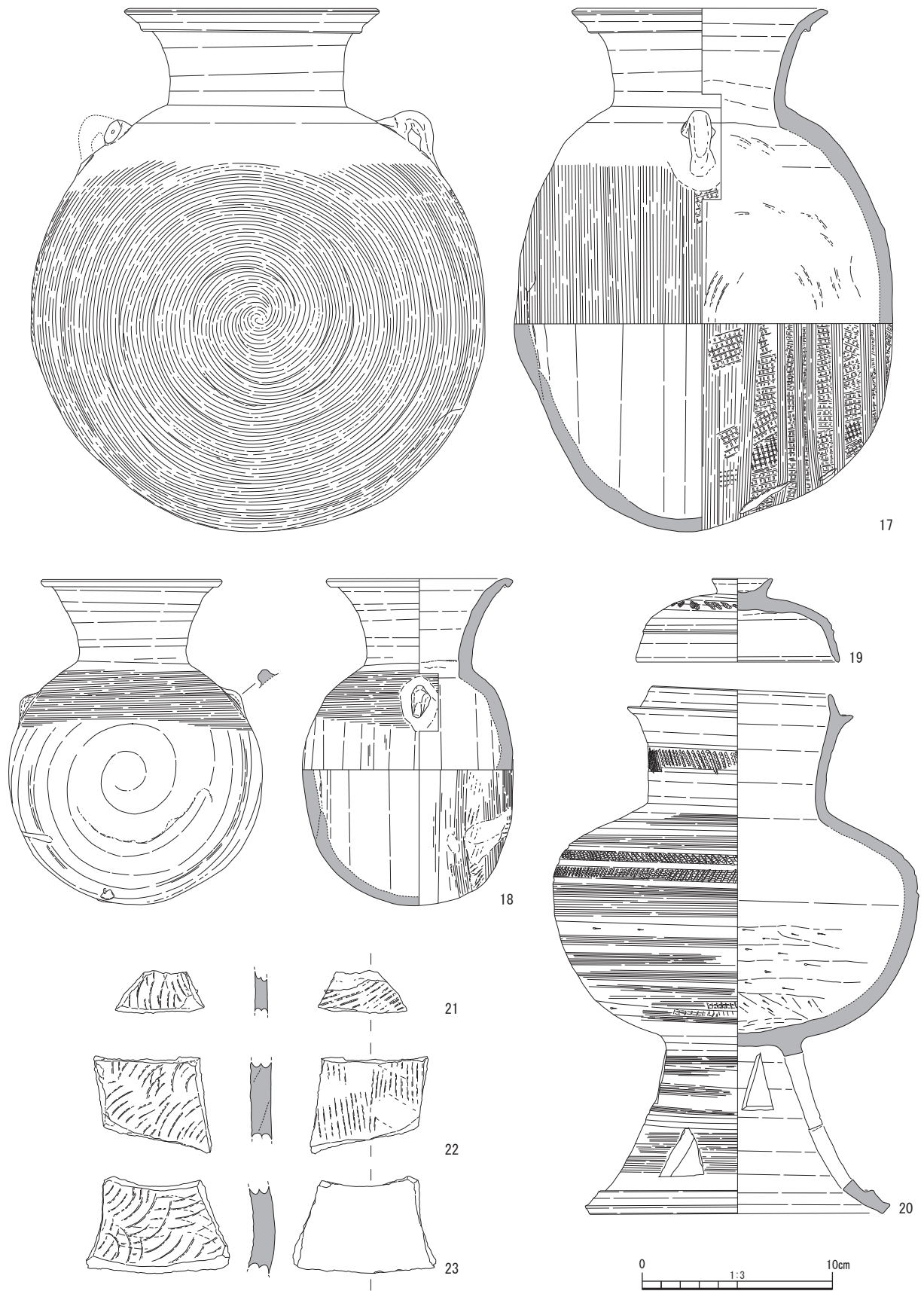
可能性がある。4・5の蓋と組み合う身はない。

高 坏 高坏は4点あり、坏部の残る資料はいずれも無蓋高坏である。11は口径13.55cmと大型の無蓋高坏で、坏部の外面下半には沈線により作出された突帯と稜の間に刺突文がほどこされる。この刺突文は当たりの幅も狭くやや粗いものである。脚部の残存最下部に沈線が1条残っており、2段3方長方形透かしをもつ長脚無蓋高坏である。透かしは斜めに深く切り込まれ内側が広いため、脚部内面に回転ナデ成形部分は残っていない。各透かし右側の器壁は、2段階にわけて切り込みがなされたために面取りしているように見える。12は3方に長方形透かしをもつ大型高坏の脚部と考えられる。脚部下位に沈線が1条めぐるが、透かしは目安となるべき沈線より低く配置されている。端部は丸くおさめる。透かしの切り込みが深く、透かし上部内面が隣の透かしと近接している点や、透かし部分の器壁に面取りがあるといった様相に11と共通性をもつ。11も12も他の須恵器よりやや色調が明るい点も共通するが、接点はなく同一個体かどうかは不明である。

13は完形の長脚無蓋高坏である。坏部外面には、浅く幅の広い凹線状の沈線により突出させた丸



第40図 須恵器(1)



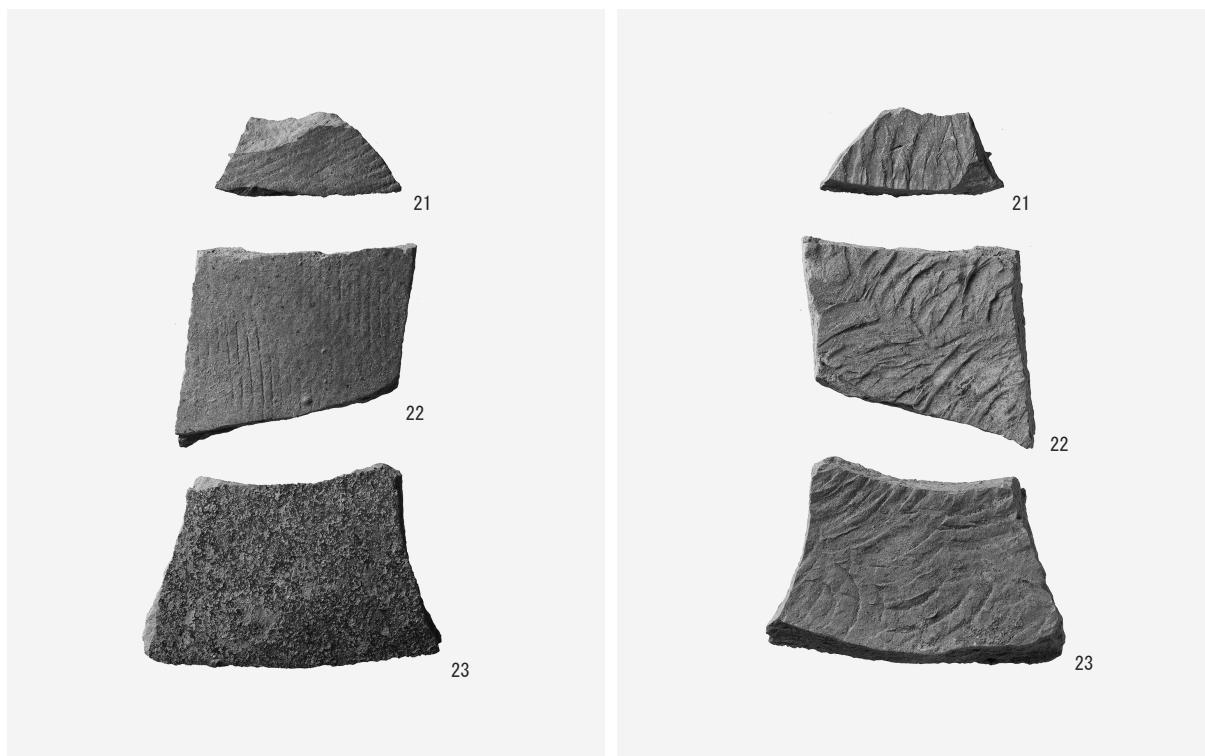
第41図 須恵器(2)

みのある突帯が2条めぐり、突帯間に刺突文はない。脚部には、中位に2～3条、下位に2条めぐらせた沈線を目安に、2段3方長方形の透かしをもつ。上部の透かしは上半の切り込みが浅いものの、下半は貫通している。脚端部は直立する緩い面をもつ。脚部内面上端は小穴状に凹んでおり軸棒の痕跡かもしれない。脚部内面に自然釉がかかり、倒立状態で焼成したことがわかる。14は、残存部上端に沈線が1条わずかに残り、2段3方に透かしをもつ長脚高坏の脚部である。透かしの上端は残存しないが、急激に上部の幅を減じているため、三角形に近い形状と思われる。想定される脚部の高さもやや13より低く、新相の特徴であろう。脚端部は部分的に面をもつが、丸みを帯びている。

臚 15は丸みをもつ胴部と大きく開く口頸部をもつ平底の臚である。胴部上半には孔の上部と重なる位置に浅い沈線2条間を刺突文で充填する文様帯がめぐり、刺突文は一部途切れて空白となる部分がある。頸部中位の沈線は全周せず、その上部にほどこされる波状文は、上下の動きは大きく幅も広いが、かすれている部分も多く、やや粗い印象を与える。口縁部は内面の屈曲が弱く、大きく外反する。頸部の基部径はやや太い。底部内面には棒状工具による圧痕が複数残るが、これは回転ナデのみで成形される出雲地域の臚には一般的ではない特徴である。

直口壺 16は丸みをもちつつやや張った肩部と、外反しながら上方へ伸びる口頸部をもつ直口壺である。口縁端部内面には沈線が1条めぐり、下半は自然釉により不明瞭ながらも回転ヘラケズリがほどこされている可能性がある。

提瓶 提瓶には大型の17と中型の18がある。17は胴部が大きく膨らみ、広口の口縁部をもつ。口縁端部下端は粘土紐を貼り付けて突出させている。把手は斜め上方へ伸びるしっかりとした環状のもので、下側は下方へやや伸ばしてナデ付けられる。胴部の底部側面には、内面に同心円文当て具痕が、外面に格子風タタキがみられ、外面はタタキの後にカキメをほどこす。閉塞側面の内面には当て具痕がみとめられず、内外面には擬口縁付近の成形にともなうと思われるシワが残るため、閉塞側面側はタタキ工程を経ずに丁寧なカキメがほどこされたようである。擬口縁の径は4cm程度。



第42図 須恵器甕片 (左：外面 右：内面)

18はやや扁平な胴部と広口の口縁部をもつ。口縁端部は下方へ小さく折り返し、丸みをもった面を作出する。胴部内面には回転ナデが残り、とくに底部側面の内面中心部には強い回転ナデにより粘土の突起が生じている。擬口縁の径は約4.2cm。閉塞側面外面はカキメ後回転ナデにより仕上げられ、上部～側面にかけてはカキメがほぼナデ消されている。底部側面の外面は粗いナデ後に粗いカキメがほどこされる。閉塞側面のカキメが底部側面のナデ→カキメ調整に先行する。底部側面と閉塞側面のカキメの間には板状の圧痕が幾筋も残っており、内面に当て具痕はみられないものの、タタキ調整をほどこした可能性がある。また、胴部側面のカキメ後、不定方向に幅広の静止ナデがほどこされている。肩部には提瓶正位置での水平方向にカキメがほどこされ、その後、突起状の把手が貼り付けられている。この把手はコブ状というよりは肩が張るような三角形を呈し、側面にはやや凹む部分もみられることから、環状把手を意識したつくりと考えられる。

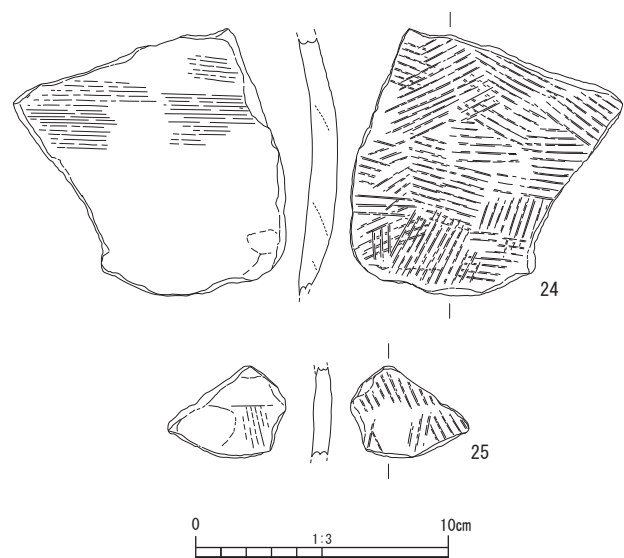
蓋付脚付壺 19は脚付壺の蓋と考えられる資料である。口径は10.5cm。斜め上方へ開きやや高さのある輪状のつまみを有し、つまみ上部の径は3.0cmを測る。天井部にはヘラケズリの後に刺突文をほどこす。施文具は壺本体とは異なる。肩部には2条の沈線がめぐるが、実際の屈曲は沈線の上に位置しており、沈線間は稜ではなく突帯を形成している。口縁端部内面には低い位置に沈線がめぐり、段状に仕上げている。a 4類。

20は環状口縁をもつ脚付壺である。器高27.5cm、脚部高約9cm、胴部最大径は19.1cmを測る。口縁部は受け部径10.2cm、口径8.8cm、たちあがり高1.15cmと、共伴する蓋坯より内傾気味だが高い立ち上がりをもつ。頸部は中位に2条の沈線をほどこし、その間を刺突文で充填する。胴部外面は上半部にカキメをほどこした後、下半部に回転ヘラケズリ後カキメをほどこす。胴部下半には部分的にカキメに先行するタタキ痕もみられる。肩部にはカキメの後、3条の沈線間に上下で傾きを違えた2段の刺突文を入れる。刺突は左から右へほどこされている。施文具は歯の間隔が肩部上下段で異なるため、各々別の工具を使用している可能性がある。胴部内面上半には回転ナデが残るが、底面には脚部の接合と関係すると思われる指オサエと不定方向の強いナデがみとめられ、周囲には斜め方向のヘラケズリが、その上部から胴部中位にかけては横方向のヘラケズリがほどこされている。脚部外面は回転ナデの後弱いカキメがほどこされ、中位に沈線が2条めぐり、三角形透かしが2条沈線を挟んで2段3方千鳥状に配されている。脚端部はナデによりシャープに仕上げられている。

甕 小片が3片あり、自然釉により外面調整が不明瞭であるものを除き、いずれも外面には格子風タタキ、内面には同心円文当て具痕がみとめられる。

(2) 軟質土器 (第43図、図版22-1)

24と25はやや軟質に焼成された土器片である。いずれにもぶい橙色を呈し、外面には平行タタキ、内面にはヨコハケがほどこされる。遺存状態が悪く不明瞭だが内面の一部はヨコナデがほどこされているかもしれない。甕の破片と思われるが、古天神古墳にともなう資料かは不明である。



第43図 軟質土器

8 埴 輪

図化可能な破片が6点あり、1・3・5が鳥根大学所蔵、2・4が東京国立博物館所蔵、6が恩田清採集資料である（第44・45図、図版22-2・3）。鳥根大学所蔵資料ではほかに10片、恩田清氏採集資料ではほかに3片を確認できるが、埴輪であろうと推測できる程度の細片でしかない。大多数は胎土や器壁の厚みなどがおおよそ共通しており、形態的特徴などから円筒埴輪と考えられる。1片のみ特徴を異にする破片があり、形象埴輪となる可能性が考慮される。いずれも黒斑はなく、窖窯によって焼成されたものであろう。

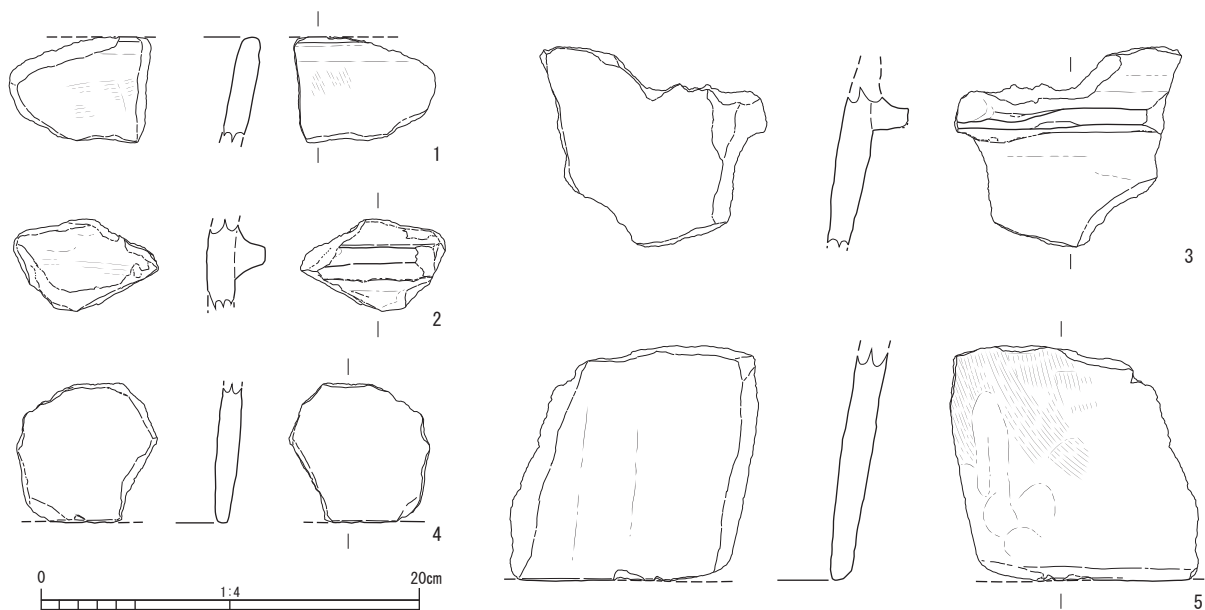
円筒埴輪 円筒埴輪として図示できる破片は5片である。遺存状態が悪く、全容を把握できる資料はない。高い突帯をもつ点、底部調整に円柱状工具による叩き技法を採用する点が最大の特徴である。

1は口縁部の破片で、外面にナメハケ、内面にヨコハケをほどこし、口縁端部をヨコナデによって仕上げる。端部はわずかな丸みをもつ形状である。焼成はやや軟質、やや緻密な胎土をもち、 $\phi 1$ mm以下の長石を多量、石英を少量含む。7.5YR6/8 橙色を呈する。

2は突帯のある胴部片である。磨滅が著しいが、内面にヨコハケと横方向のユビナデらしき痕跡がある。突帯は約1.6cmと高く突出し、ヨコナデによって調整される。突帯下方のナデがあまく、器壁との接合痕跡がみとめられる。焼成は軟質、やや緻密な胎土をもち、 $\phi 2$ mm以下の長石をやや多く含む。5YR6/6 橙色を呈する。

3も突帯のある胴部片である。全体に磨滅が著しく、内外面とも調整が不明瞭である。突帯は約2.0cmと高く突出し、やや雑なヨコナデによって調整される。突帯下方のナデがあまく、器壁との接合痕跡が明瞭に残る。焼成はやや軟質、やや緻密な胎土をもち、 $\phi 1$ mm以下の長石を多量、石英を少量含む。5YR6/6 橙色を呈する。

4は底部片である。内外面は磨滅が著しく、調整は不明瞭である。断面をみると、底端部付近で厚みを減じており、底部調整がほどこされた可能性を想定できる。ただし、底端部には丸みがある点から、端部を切り取る調整（カット技法）はなされていないと考えられる。焼成は軟質、やや緻密な胎土を



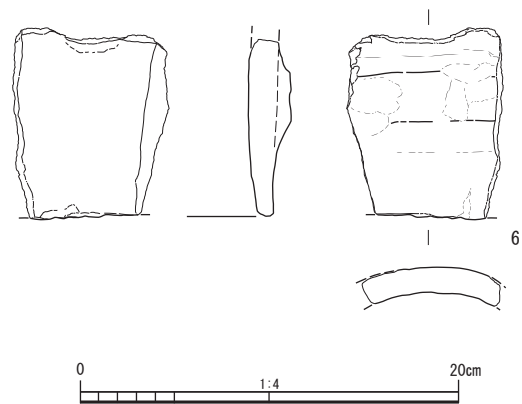
第44図 円筒埴輪

もち、 ϕ 2 mm以下の長石をやや多く含む。5YR6/6 橙色を呈する。

5も底部片である。磨滅するが、外面にナナメハケがみられる。内面調整は不鮮明ながら工具の圧痕がわずかにみえる。底端部付近の厚みが薄くなっており、底部調整がほどこされたと考えられる。底端部が平坦な面をなさないことから、底部調整は倒立後に円柱状工具を内外に使用する叩き技法によるものと推定される。外面のナナメハケは、倒立状態で底部調整後にほどこしたものである可能性が高い。底端部付近の器壁がとくに薄くなって、そこに

ハケメがみとめられないのは、最終調整として底端部付近の内外を押圧して仕上げた可能性を考えておきたい。焼成はやや軟質、やや緻密な胎土をもち、 ϕ 1 mm以下の長石を多量、石英を少量含む。5YR6/6 橙色を呈する。

不明埴輪 6は円筒埴輪と確實視できる破片とは異なって、上面幅が約2.6cmと幅広であり、高さ約7mmと低平な突帯をもつ破片がある。突帯がなだらかに高さを増し、上下が丁寧にヨコナデによって仕上げられる。図示した下方の端部付近の器壁が薄くなる点から、円筒埴輪の底端部と同様に内外を押圧調整したものと考えられるが、突帯が幅広かつ低平である点、底部とした場合の高さが突帯上端までで約7.5cm、下端までは約5cmと極端に低い。したがって、円筒埴輪の底部片ではなく、別の形象埴輪などの底部となる可能性を考えておきたい。内外面の調整は磨滅により不明瞭である。焼成はやや軟質、やや緻密な胎土をもち、 ϕ 1 mm以下の長石を多量、石英を少量含む。5YR6/6 橙色を呈する。



第45図 不明埴輪

註

- (1) 町田章は、この靱尻金具を「鉄製の靱尻金具」と表記している〔町田1987〕。町田がこの靱尻を実見して確認したものか、それとも高橋報文からの引用間違いであるのかは不明である。ここでは高橋報文の所見にしたがいたい。
- (2) 同様の仮留め用の釘の孔は、島根県かわらけ谷横穴墓群出土の双竜環頭大刀などにもみられる〔松尾（編）2001：58〕。
- (3) 曳野律夫氏・松本岩雄氏・内田律雄氏のご教示による。
- (4) 須恵器の分類は、〔大谷1994〕にしたがう。

引用文献

- 伊藤徳広・稲田陽介・深田浩・丹羽野裕 2008「恩田清氏採集資料の整理報告」『古代文化研究』第16号 島根県古代文化センター pp.1-7
- 岩淵一夫・大橋泰夫・田代隆 1986『星の宮神社古墳・米山古墳』栃木県埋蔵文化財報告書第76集 栃木県教育委員会
- 白杵 勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 pp.49-70
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 pp.39-82
- 大谷晃二（編）1996『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ 島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘

- 小方良臣・森貞次郎・石山勲・酒井仁夫 1982『竹原古墳』若宮町文化財調査報告書第4集 若宮町教育委員会
- 角田徳幸 1993「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会 pp.69-103
- 小林三郎・熊野正也(編) 1976『法皇塚古墳』市立市川博物館研究調査報告第3冊 市立市川博物館
- 嶋田光一(編) 1991『川島古墳』飯塚市文化財調査報告書第14集 飯塚市教育委員会
- 高橋健自 1919「出雲國八東郡大草古天神古墳発掘遺物」『考古学雑誌』第9巻第5号 日本考古学会 pp.12-16
- 瀧瀬芳之・野中仁 1996「埼玉県内出土象嵌遺物の研究—埼玉県の象嵌装大刀—」『財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第12号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.37-94
- 野津左馬之介(編) 1925「八東郡大庭村大字大草古天神古墳」『島根縣史』第4巻 古墳 島根県 pp.242-251
- 町田 章 1987「岡田山1号墳の儀仗大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会 pp.84-98
- 松尾充晶(編) 2001『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書10 島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター
- 本村豪章 1981「古墳時代の基礎研究稿—資料篇(I)—」『東京国立博物館紀要』第16号 東京国立博物館 pp.11-197
- 森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号 史学研究会 pp.1-43
- 渡辺貞幸 2013「政府に報告された市内発見の古墳」『松江市史研究』4号(松江市歴史叢書6) 松江市教育委員会 pp.1-16